

# 庄・蔵本遺跡第 31 ～ 35 次調査の成果

端野晋平\*

\* 徳島大学埋蔵文化財調査室

## はじめに

徳島大学蔵本キャンパスに所在する庄・蔵本遺跡は、縄文時代晩期から近現代にかけての遺跡として知られ、これまで発掘調査によって、考古学・歴史学上のさまざまな研究領域に大きく貢献する事実が明らかとなってきた。徳島大学埋蔵文化財調査室が 2017 年度～2021 年度に実施した第 31 ～ 35 次調査でも、弥生時代前期～近世にかけての土地利用の実態に迫る成果が得られたので、本稿で報告する。

## I 遺跡を取り巻く環境と概要

### A 遺跡の位置と地理的環境

国立大学法人徳島大学蔵本キャンパスは、徳島市庄町 1 丁目と蔵本町 2 丁目・3 丁目にわたって所在し、徳島県遺跡地図（徳島県教委・徳島県埋文編 2006）上では、蔵本遺跡の大部分および庄遺跡の東端を含む範囲に位置する（図 1-1・5・6）。本学では『庄・蔵本遺跡 1』（北條編 1998）の刊行以降、同キャンパス内の遺跡については、独自にこの名称を用いており、本稿でもこれに従う。

庄・蔵本遺跡は、吉野川の支流である鮎喰川の下流域右岸、四国山地東端の眉山北麓に位置する。現在の鮎喰川は、四国山地の雲早山に源を発し、外帯を約 50km 北流して吉野川と合流する。下流域では、数面の沖積段丘面を伴う扇状地性平野が発達することが知られている。また、上流域では御荷鉾構造線をはじめとする複数の破碎帯を通過し、また地すべりや山腹崩壊により、下流域の平野部において、礫層が厚く発達し、礫床河道となっている（古田 2005）。

吉野川下流域から河口付近にかけての古環境復元の研究によれば、約 2 万～1 万 8 千年前の海水準は、現在に比べ約 100m 前後低く、その後の温暖化にともない次第に上昇したとされる。約 6 千年前の縄文海進のピーク時には、吉野川河口部の汀線は、現在の地形面の標高 5m 程度内陸に入り込んでいたと推定され、鮎喰川は直接、紀伊水道に注ぎ込み、河口部に三角州性扇状地を形成したとみられる。その後、やや寒冷化する弥生時代以降、海面の低下と吉野川から流出した土砂の堆積により、三角州が発達していく（古田 1996, 2005, 平井 1998）。

### B 歴史的環境

庄・蔵本遺跡は、縄文時代晩期から近現代にいたるまでの複合遺跡である。その形成過程を正しく理解するためには、当然のことながら、周辺の遺跡まで視野を広げることが不可欠である。そこで、周辺遺跡について、以下、時代ごとに概観する。

**旧石器時代** 現在のところ、庄・蔵本遺跡周辺で旧石器時代の遺跡は確認されていない。徳島県域においては、吉野川中・下流域の北岸に遺跡が分布する（氏家 2002）。



図1 庄・蔵本遺跡と周辺遺跡の位置

1. 庄・蔵本遺跡 2. 蜂須賀家万年山墓所 3. 三谷遺跡 4. 南蔵本遺跡 5. 蔵本遺跡 6. 庄遺跡 7. 中島田遺跡 8. 南庄遺跡 9. 袋井用水の水源地 10. 鮎喰遺跡 11. 名東遺跡 12. 節句山1号墳 13. 節句山2号墳 14. 穴不動古墳 15. 八人塚古墳 16. 敷地遺跡 17. 観音寺遺跡 18. 矢野遺跡 19. 延命遺跡(徳島県教委・徳島県埋文編 2006 をもとに作成)

**縄文時代** 徳島県域において、縄文時代草創期～前期の遺跡は存在するものの、遺跡数は限られ、その様相は不明瞭である。中期になると、遺跡数が若干増加し、三好郡東みよし町の加茂谷川支流沿いに位置する加茂谷川1号岩陰や、吉野川中流域の美馬郡つるぎ町貞光前田遺跡では、船元Ⅰ式・里木Ⅱ式土器が確認されている。鮎喰川下流域左岸の矢野遺跡(図1-18)では、中期末～後期前葉の居住域が検出されている(湯浅2002)。

庄・蔵本遺跡周辺で、遺跡形成が顕著となるのは後期後葉以降であり(中村編2011)、庄遺跡(図1-6)の財務省蔵本住宅地点では、後期後葉の住居跡1棟が検出されている(岡山編1999)。また、同遺跡の各調査地点では、後期末～晩期前半の土器や石器が確認されている(湯浅2002, 中村編2011)。名東遺跡(図1-11)では、晩期後半の自然落ち込みから突帯文土器と石器が出土した(勝浦編1990)。

**弥生時代** 三谷遺跡(図1-3)では名東遺跡より新しい時期に位置づけられる、突帯文土器と遠賀川式土器との共伴関係が確認されている(勝浦編1997)。近年の調査でもこの時期の集落域の一部が明らかとなっている(中村2016・2017)。庄・蔵本遺跡では、弥生時代前期前葉～中葉の居住域・墓域・生産域からなる集落の全容が把握され、隣接する南蔵本遺跡(図1-4)まで広がることを確認されている(近藤編2014ほか)。これらの遺跡では、前期末から中期初頭の洪水起源砂層が確認されており、洪水砂によって集落のほとんどが埋没したものと推定されている(中村編2011ほか)。庄・蔵本遺跡や名東遺跡周辺で確認された自然流路は、鮎喰川の旧分流の一部とみられ、弥生時代初期の居住域は、これらの旧分流の中州か眉山北麓斜面に存在したと考えられている(古田2005)。

庄・蔵本遺跡一帯では、中期前葉～中葉の遺構は極めて少なく、この時期の集落構造は判然としない。

中期後葉になると、居住域や墓域が明瞭になる。鮎喰川流域では、右岸の名東遺跡や庄・蔵本遺跡一帯で数十基の方形周溝墓、左岸の矢野遺跡(図 1-18)で、30 棟前後の竪穴住居跡が確認されている。ただし、水田などの生産域はわかっていない。つづいて後期初頭になると、これらの遺跡一帯では、遺構・遺物の数はともに極端に減少する(近藤 2012)。なお、名東遺跡(図 1-11)では、中期後葉～後期初頭の所産とみられる扁平紐式銅鐸の埋納遺構が検出されている(勝浦編 1990)。

後期前半は、それ以前に比べると、竪穴住居跡の数は少なく、墓域や生産域も不明瞭である。その後、後期後半～終末期になると、竪穴住居跡数は増加し、中期後半の数を上回るようになる。矢野遺跡(図 1-18)では、蛇紋岩製勾玉の未成品や鍛冶関連遺構、突線紐式銅鐸の埋納遺構が確認されている。矢野遺跡の南に隣接する延命遺跡(図 1-19)では、墳丘墓などからなる墓域が認められ、石井城ノ内遺跡では水田が確認されている(近藤 2012)。

**古墳時代** 眉山西北麓の丘陵尾根上には、前期古墳が点在する。節句山古墳群(図 1-12・13)の 2 号墳からは、浮彫式獣帯鏡が出土している。本学考古学研究室が測量調査を実施した八人塚古墳(図 1-15)は、全長約 60m の前方後円墳で、川原石を用いた積石塚である(東ほか 2006)。庄・蔵本遺跡の南側に面した眉山北麓では、今のところ前期古墳や居住域は確認されていない。中期の古墳、居住域もまた未発見である。後期になると、横穴式石室をもつ穴不動古墳(図 1-14)などがみられるが、やはり集落域はわかっていない(北條編 1998, 中村編 2011)。

**古代** 観音寺遺跡や敷地遺跡(図 1-16・17)の発掘調査により、多数の木簡および多彩な遺構・遺物が確認され(藤川編 2002 ほか)、これらの遺跡一帯は、国府であった可能性が高い(藤川 2015 ほか)。庄・蔵本遺跡と名東遺跡周辺では、大型の掘立柱建物跡や墨書土器、石帯、木製祭祀具などが相対的に多く出土しており、郡衙である名東郡にあたる可能性が指摘されている(早淵 2002, 藤川 2002)。また、この一帯では条里地割に関係するとみられる溝が検出されている。

**中世** 12 世紀後半～13 世紀が中心時期とされる中島田遺跡(図 1-7)では、道路状遺構と、その両側で屋敷地区画が確認されている。また、徳島県域の他の遺跡で多数を占める和泉型瓦器碗よりも、吉備系土師器碗が多数出土したことが注目されている(石尾 2002, 島田 2008)。そこから、この遺跡を物資の集散地とみなし、さらに「市庭」跡(福家 2002)や「市町」(石尾 2002)と解釈する見解も提出されている。名東遺跡や庄遺跡周辺では、溝などの遺構や瓦器・土師器などの遺物が検出されているが、遺跡の性格ははっきりしない(福家 2002, 島田 2008)。

**近世** 庄・蔵本遺跡一帯は、城下町周辺の散村および水田であった可能性が高く、後述する鮎喰川の改修工事などにより水田開発が進められていったと考えられる。この時期の水田開発により、古墳時代から中世にかけての遺構の多くが、削平された可能性が指摘されている(中村編 2011)。また、佐古に所在する蜂須賀家万年山墓所(図 1-2)は、10 代藩主蜂須賀重喜が藩政改革を背景に造成した儒式の墓地で、以後、蜂須賀家は仏式の興源寺と儒式の万年山による両墓制をとるようになった(徳島県の歴史散歩編 2009)。

鮎喰川の河川改修の記録としては、天正 15 年(1587)の「逢庵堤」が知られている。これは徳島城の築城および名東郡の洪水対策のために、右岸の築堤が行われたというものである。その後、享保年間(1716～1736 年)や寛政年間(1789～1801 年)の工事によって、右岸の連続築堤が完成された。しかし、逆にこれが天井川化を加速させ、今日にいたる洪水被害の一因となったという(古田 2005)。ほかに、元禄年間(1688～1704 年)には、鮎喰川流域右岸の水不足解消のため、袋井用水(図 1-9)の

開削が開始されたという記録もある。また、蔵本付近は伊予街道と讃岐街道の分岐点に位置し、交通の要所でもあった（ふるさと徳島編 1991）。

**近現代** 現在の蔵本キャンパスとその周辺にあたる区域では、1907年、陸軍第10旅団司令部、歩兵第62連隊が設置されたが、第1次大戦後は廃止された。これにかわり1925年、歩兵第43連隊が移駐し、以後、1945年まで存続することとなった。また、1908年に徳島衛戍病院が設けられ、その後、徳島陸軍病院と改称された。また、1945年7月4日の徳島大空襲の後、同月24日に1トン爆弾によって、歩兵第43連隊本部を標的とした蔵本空襲があった（山川 1995）。

終戦後まもなく連隊跡地には、1947年に官制徳島医学専門学校および同附属病院が移転し、翌年には徳島医科大学および同附属病院となった。1949年には、国立大学徳島大学および同附属病院が設置された。また、陸軍病院跡には県立中央病院、練兵場跡には蔵本公園・賀茂名中学校、実弾射撃場跡には徳島県立林業試験場（林業総合技術センター）が、それぞれ置かれることとなった（ふるさと徳島編 1991）。

## C 庄・蔵本遺跡の概要

1982年に始まった蔵本キャンパスでの発掘調査は、2022年9月現在、計35次にも及び、35,000㎡以上の面積がその対象となった（図2、表1）。前節でも適宜触れてきたが、ここではとくに個々の調査地点に焦点をあて、その成果を振り返っておきたい。

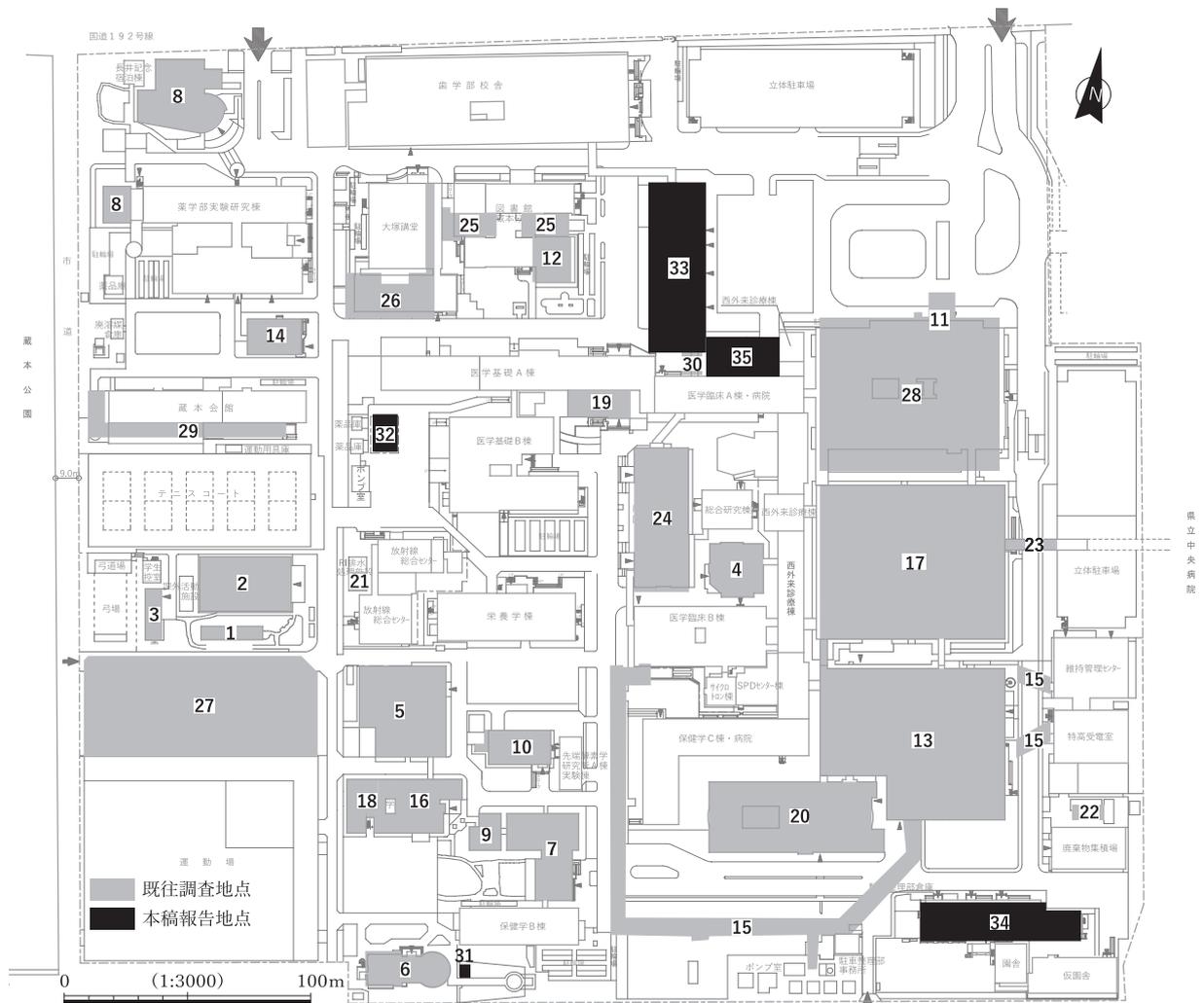
庄・蔵本遺跡では、縄文時代から近現代にいたるまでの幅広い時期の、遺構・遺物が多数確認されている。なかでも、弥生時代前期前葉～中葉のものについては、墓域・生産域・居住域からなる集落の全体像を描き出すほどの成果が得られており、注目される。

この時期の墓域については、キャンパスの南西部（第6次調査地点）と南東部（ポイラータンク地点、第22次調査地点）の二か所で確認されている。第6次調査地点では、石棺墓・配石墓・土壙墓・甕棺墓といった計20基以上の墓からなる墓域が明らかとなった（北條編 1998）。ポイラータンク地点・第22次調査地点でも、石棺墓・土壙墓が確認された（中村 2010b, 端野編 2018）

生産域については、水田跡が検出されており（第17・19・24・28次調査地点）、これが本遺跡の東側に位置する南蔵本遺跡県立中央病院地点まで広がることがわかっている（近藤編 2014）。また、構内の南端を東流する旧河道（第5・13・15・16・27次調査地点）と、ここから分岐する用水路網（第5・9・10・13・15・16・26・27・29次調査地点など）が検出され、水田への給水システムも判明しつつある。さらに、第20次調査では、畝を伴う畑跡（中村 2009b）が確認されている。こうした弥生時代前期中葉の畑跡の検出例は、全国的にみても極めてまれであり、特筆に値する。第27次調査でも畝状の遺構が検出されており、これも畑跡の可能性がある（端野ほか 2015）。最近では南蔵本遺跡でも、畝を伴う畑跡が確認されている（徳島県・徳島県埋文 2021）。

居住域については、第1～3・15次調査では、構内で土坑群が検出され、その存在がうかがえるものの、明確な住居跡は検出されていない。ただし、庄・蔵本遺跡の南側に位置する南蔵本遺跡では、この時期の住居跡が数基検出されており（徳島市教委 1989, 中村 1998・2002 ほか）、遺跡南側の眉山北麓に居住域の存在が推定される。また、この時期の植物種実や木製品が良好な状態で検出されたことは、考古学だけではなく植物学的にもきわめて重要な成果といえる（中村 2009b・2010c, 端野ほか 2015 ほか）。

以上の弥生時代前期前葉～中葉の集落は、遅くとも弥生時代前期末から中期初頭にかけての時期に、



- |                       |                                     |                     |
|-----------------------|-------------------------------------|---------------------|
| 1. 体育館器具庫新営           | 13. 東病棟新営(病棟I期)                     | 24. 藤井節郎記念医科学センター新営 |
| 2. 体育館新営              | 14. 医薬資源教育研究センター新営                  | 25. 附属図書館蔵本分館増築II期  |
| 3. 課外活動共用施設新営         | 15. 共同溝設置                           | 26. 大塚講堂改修          |
| 4. 医学部臨床講義棟新営         | 16. ゲノム機能研究センター新営                   | 27. 立体駐車場新営         |
| 5. 動物実験施設新営           | 17. 中央診療棟新営                         | 28. 外来診療棟新営         |
| 6. 青藍会館(同窓会館)新営       | 18. ゲノム機能研究センター増築                   | 29. 学生支援センター改修      |
| 7. 医療技術短期大学校舎新営       | 19. 医学系総合実験研究棟II期改修                 | 30. 渡り廊下建設          |
| 8. 長井記念ホール・薬学部実験研究棟新営 | 20. 西病棟新営                           | 31. 解剖体慰霊碑区域        |
| 9. 医療技術短期大学校舎増築       | 21. 医学系総合実験研究棟III期改修<br>(RI棟排水処理設備) | 32. 給水設備新営          |
| 10. 酵素科学研究センター新営      | 22. 西病棟新営その他電気設備                    | 33. 病院福利厚生施設新営      |
| 11. MRI・CT装置棟新営       | 23. 連絡橋建設                           | 34. 寄宿舎棟新営          |
| 12. 附属図書館蔵本分館増築       |                                     | 35. 多用途型トリアージスペース新営 |

図 2 庄・蔵本遺跡における調査地点の位置

その大部分が洪水砂によって埋没したとみられている(中村編 2011 ほか)。この洪水砂層上に堆積した弥生時代前期末・中期初頭～中世の土層は、土壌化が著しく進行し、時期ごとに遺構面を検出することは困難である。そのため、この間については、集落の全体像を描くことは難しい。断片的な把握にとどまるが、重要な遺構・遺物について以下、詳述する。

第 7 次調査では、弥生時代中期初頭～中葉の溝が検出されている。この時期の遺構は、本遺跡一帯では検出例が極めて少なく、集落構造の変遷を押さえるうえで、貴重な資料である。構内の南半部に位置する第 2・13・16・20・27 次調査地点では、弥生時代中期後葉前後の方形周溝墓が確認されている(定森・中村編 2005, 中村 2009b, 端野ほか 2015 ほか)。また、第 16・18 次調査地点では、終末期の

表1 庄・蔵本遺跡発掘調査一覧

調査 回数	調査地点	調査 年度	調査期間	調査主体	調査担当者 *は調査主任	調査面積 (㎡)	文献
1	体育館器具庫新営	1982	1982年11月30日 ～1983年2月5日	徳島県教育委員会	島巡賢二, 秋山浩一ほか	147	中村編2010
2	体育館新営	1982・ 1983	1983年1月中旬～ 11月30日	徳島県教育委員会	福家清司, 久保脇美朗 ほか	1160	定森・中村編2005, 中村編2010
3	課外活動共用施設新営	1984	1984年7月3日～8 月10日	徳島県教育委員会	福家清司, 久保脇美朗 ほか	157	中村編2011
4	医学部臨床講義棟新営	1985	1985年4月25日～ 7月14日	徳島県教育委員会	松永住美, 大谷泰久ほか	655	中村編2010
5	動物実験施設新営	1985	1985年9月2日～ 12月28日	徳島県教育委員会	松永住美, 大谷泰久ほか	1321	中村編2008
6	青藍会館(同窓会館)新営	1986	1986年12月11日 ～1987年3月20日	徳島大学	岡内三真, 河野雄次ほか	540	北條編1998
7	医療技術短期大学校舎新営	1987	1987年4月1日～8 月31日	徳島県教育委員会	羽山久男, 久保脇美朗 ほか	870	中村編2011
8	長井記念ホール・薬学部実験研究棟 新営	1990	1990年1月11日～ 2月28日	徳島大学	岡内三真, 桑原久男	1430	北條編1998
9	医療技術短期大学校舎増築	1992	1992年7月11日～ 9月4日	徳島大学	東潮, 北條芳隆*	310	北條編1998
10	酵素科学研究センター新営	1993	1993年5月26日～ 9月30日	徳島大学	東潮, 北條芳隆*	623	北條編1998
11	MRI・CT装置棟新営	1993	1994年2月18日～ 3月17日	徳島大学	東潮, 北條芳隆*	224	HPに概要報告書を掲載
12	附属図書館蔵本分館増築	1993	1994年2月25日～ 3月24日	徳島大学	東潮, 北條芳隆*	288	HPに概要報告書を掲載
13	東病棟新営(病棟Ⅰ期)	1994～ 1996	1995年3月27日～ 1996年7月31日	徳島大学	東潮, 北條芳隆*	5000	HPに概要報告書を掲載
14	医薬資源教育研究センター新営	1995	1995年6月21日～ 9月5日	徳島大学	東潮, 橋本達也*	300	HPに概要報告書を掲載
15	共同溝設置	1996・ 1997	1996年11月1日～ 1997年6月7日	徳島大学	北條芳隆, 橋本達也, 中村豊*	1754	HPに概要報告書を掲載
16	ゲノム機能研究センター新営	1998	1998年9月1日～ 1999年2月2日	徳島大学	北條芳隆, 橋本達也*, 中村豊	1000	HPに概要報告書を掲載
17	中央診療棟新営	1999	1999年8月1日～ 2000年3月	徳島大学	北條芳隆, 中村豊*	5000	HPに概要報告書を掲載
18	ゲノム機能研究センター増築	2001・ 2002	2002年3月11日～ 6月10日	徳島大学	北條芳隆, 中村豊*	311	HPに概要報告書を掲載
19	医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修	2006	2006年4月17日～ 7月25日	徳島大学	定森秀夫, 中村豊*, 中原計	324	中村2009a
20	西病棟新営	2006	2006年6月27日～ 2007年3月15日	徳島大学	定森秀夫, 中村豊*, 中原計	2645	中村2009b
21	医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修(RI 棟排水処理設備)	2007	2007年10月22日 ～11月7日	徳島大学	定森秀夫, 中村豊*, 中原計	45	中村2010a
22	西病棟新営その他電気設備	2007	2008年1月9日～2 月14日	徳島大学	定森秀夫, 中村豊*	103	中村2010b, 端野編2018
23	連絡橋建設	2011	2011年4月4日～4 月18日	徳島大学	中村豊*, 遠部慎	100	HPに概要報告書を掲載
24	藤井節郎記念医学科学センター新営	2011	2011年10月7日～ 2012年3月14日	徳島大学	中村豊*, 遠部慎	1800	三阪編2016
25	附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期	2011	2011年10月6日～ 10月26日	徳島大学	中村豊*, 遠部慎	430	三阪編2016
26	大塚講堂改修	2012	2012年4月9日～6 月1日	徳島大学	中村豊, 遠部慎*, 山 口雄治	1030	三阪編2016
27	立体駐車場新営	2012・ 2013	2012年5月1日～ 2013年4月19日	徳島大学	中村豊, 遠部慎, 山口 雄治*	3610	端野ほか2015
28	外来診療棟新営	2012	2012年7月2日～ 2013年1月9日	徳島大学	中村豊, 遠部慎*, 山 口雄治	3688	三阪編2016
29	学生支援センター改修	2011	2012年10月31日 ～2013年2月5日	徳島大学	中村豊*, 遠部慎, 山 口雄治	554	三阪編2016
30	渡り廊下建設	2016	2016年11月14日 ～12月1日	徳島大学	三阪一徳*	70	端野編2018
31	解剖体慰霊碑区域	2017	2017年8月21日～ 24日	徳島大学	端野晋平*・三阪一徳	20	HPに概要報告書を掲載
32	給水設備新営	2018	2018年7月31日～ 9月5日	徳島大学	端野晋平*	134	HPに概要報告書を掲載
33	病院福利厚生施設新営	2018	2018年9月6日～ 12月13日	徳島大学	端野晋平*	1490	HPに概要報告書を掲載
34	寄宿舎棟新営	2019	2019年7月1日～ 10月7日	徳島大学	端野晋平*	1212	HPに概要報告書を掲載
35	多用途型トリアージスペース新営	2020	2021年3月2日～4 月6日	徳島大学	端野晋平*	275	HPに概要報告書を掲載

鍛冶関連遺構をはじめ、轆の羽口、鉄器、スラグ、石製の鉄槌や砥石が出土しており（中村 2003）、この地での鉄器生産の存在がうかがえる。第27次調査地点では、後期後葉から終末期に位置づけられる一〇（形）土坑を伴う住居跡や、終末期の突線紐式銅鐸片（端野ほか 2015）が、第17次調査では異体字銘帯鏡片が確認されている（徳大施設・徳大埋文 2000）。

第2次調査では、古墳時代前期（布留式期前後）の住居跡や井戸が検出されており（定森・中村編 2005）、同地点辺りにこの時期の居住域が存在していたことがわかる。古墳時代中期のものとしては、第7次調査で祭祀遺構とみられる溝から須恵器、勾玉形石製品が（中村編 2011）、第9次調査で同じ溝の延長部から須恵器に加え、朝顔形埴輪片が出土している（北條編 1998）。第27次調査では、古墳被葬者の副葬品とみられる玉類や石製紡錘車が出土しており（端野ほか 2015）、これらの事実は、付近にかつて古墳が存在した可能性を示唆する。第2次調査などでは、掘立柱建物跡や墨書土器、木製祭祀具、石帯などが確認されている。これらにもとづいて、本遺跡周辺を古代の郡衙である名東郡に比定する説が提出されているのは、前節で述べた通りである。また第2次調査では、飛鳥時代から鎌倉時代にかけての大溝・水路が検出されている。飛鳥時代の大溝は東西正方向をとるのに対し、10世紀後葉～11世紀前葉の水路、13世紀前葉の大溝はやや北に振れた東西方向をとることが注意され、その背後に条里制の変化がうかがえる（定森・中村編 2005）。

近世の遺構としては、第11次調査などで水田跡や溝、井戸、暗渠が、第10次調査で木棺墓（北條編 1998）が検出されている。これらは、絵図に描かれた「蔵本村」の農民層が残したものとみなせよう。そのほか、戦前、現在の蔵本キャンパス一帯は、旧陸軍や病院に関する建造物が立地したことや、空襲にあったことが知られており、実際に発掘調査でも、これらに関連する遺構や遺物が時折、確認されている。戦後の遺物としては、美濃窯業株式会社製「大學」ロゴマーク入り硬質陶器、「厚仁会」銘入り硬質陶器が確認されている（三阪 2015）。これらは徳島大学設置（1949年）以降の歴史を、今に伝える貴重な資料である。

## II 第31次調査（解剖体慰霊碑区域地点）

### A 調査に至る経緯・経過

#### (1) 調査に至る経緯

これまで庄・蔵本遺跡では、校舎建設などの工事に伴い、30次にわたる発掘調査が実施されてきた。その結果、縄文時代晩期から近代までの幅広い時代においての人間集団の活動痕跡が確認されている。その中でも、弥生時代前期のそれは極めて豊富で、初期農耕集落の全体像が鮮明となった点は特に注目される。居住地を取り囲む二重の大溝、その周囲に墓域、畑、水田、用水路などの農耕集落を構成する諸要素がまとまって確認されている遺跡は、全国的にみてもまれである。こうした集落の出現は、それに先行する縄文文化の流れだけでは説明できず、稲作と密接に結びついた弥生文化の到来を物語るものである。そして、この背景に、外部からの移住者の関与を想定する見解も提出されている。ところが、徳島地域の弥生文化がどこから伝わったのか、その背景に人の移動が伴っていたのかについては、十分に解明されたとは言い難い。

以上の課題に答えるための最適な考古資料として、墓がある。庄・蔵本遺跡第6次調査地点（青藍会館地点）（北條編 1998）では、弥生時代前期前葉～中葉に属する墓域が検出されている。この墓域を構

成する墓については、これまで各氏によって、響灘沿岸地域（石棺墓については朝鮮半島中西部）（河野 1998）、北部九州・響灘沿岸地域（中村 1998）、北部九州地域（橋本 2001）というように、やや異なる地域に系譜を求める見解が提出されている。こうした見解の不一致は、墓の構造が十分に把握されていないこと、より具体的には木棺が本当に存在したのかどうか不明であることに起因している。また、こうした墓制の登場の背景に、人の移動を想定する見解もあるが、人骨資料による裏づけがあるわけではない。

以上の問題を解決するには、墓自体のより精緻な調査と、被葬者の人骨に対する形態学的分析およびストロンチウム同位体比分析が必要となる。幸いにも、第6次調査地点の東側には、そこからの墓域の広がりが見込まれ、かつ現状で発掘可能な地区（解剖体慰霊碑区域）がある（図3）。そこで本室では、2017年8月21～24日、この地区を対象に、墓の構造把握と、人骨資料の確保を目的とした発掘調査を実施した。調査面積は約20㎡である。なお、調査方法については、徳島市教育委員会との協議のうえで決定した。

## (2) 調査の体制

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）

調査員 端野、三阪一徳（埋蔵文化財調査室・助教）

調査補助員 岸本多美子、中原尚子、板東美幸、前田千夏、安山かおり、山本愛子（施設マネジメント部・技術補佐員）

作業員 京野里咲、松田和子（本学医学部学生）

## (3) 調査の経過

8月21日、重機（森田緑化株式会社）により表土と攪乱の除去を行った。解剖体慰霊碑区域の設置以前に存在した学生寮（旧陸軍関連建物）の基礎設置により、多くが攪乱を受けており、当初、調査を予定していた黒褐色シルト層は確認することはできず、結果として黄褐色シルト層が現れるGL-1.5m辺りまで掘り下げることとなった。22日、用具を搬入したうえで、調査区の壁の清掃と、側溝の掘削を行った。23日は、調査区内に湧水が溜まっていたため、水抜きから作業を開始した。続いて調査区壁の清掃を行った後、適宜側溝の掘削を行いつつ、遺構面の精査を行ったが、遺構を検出することはできなかった。その後、完掘状況の写真を撮影し、後日、オルソ画像（SfM/MVSによる）から実測図を作成するための調査区壁土層断面の模式図を作成した。24日は、測量座標を調査区付近に移動し、それにもとづいてSfM/MVSに用いる座標を記録した。また、前日に引き続いて調査区壁土層断面の模式図を作成した。その後、用具の撤収と周辺の清掃を行い、すべての調査を完了した。調査区の埋め戻しは、9月1～2日に、森田緑化株式会社により重機を用いて行われ、同社による芝生復旧作業は18日に行われた。

## B 調査の記録

### (1) 基本層序（図4～6）

本調査地点での基本土層は4層に分けられる。以下、調査区南壁の土層断面（c-c'）にもとづいて詳述する。なお、現地表面は標高約3.9mであり、そこから標高2.4～2.9m辺りまでは近代以降の攪乱を受けていた。

I層 明黄褐色（10YR6/6）シルトからなる。上面の標高は2.8～2.9m、厚さは約30cmを測る。

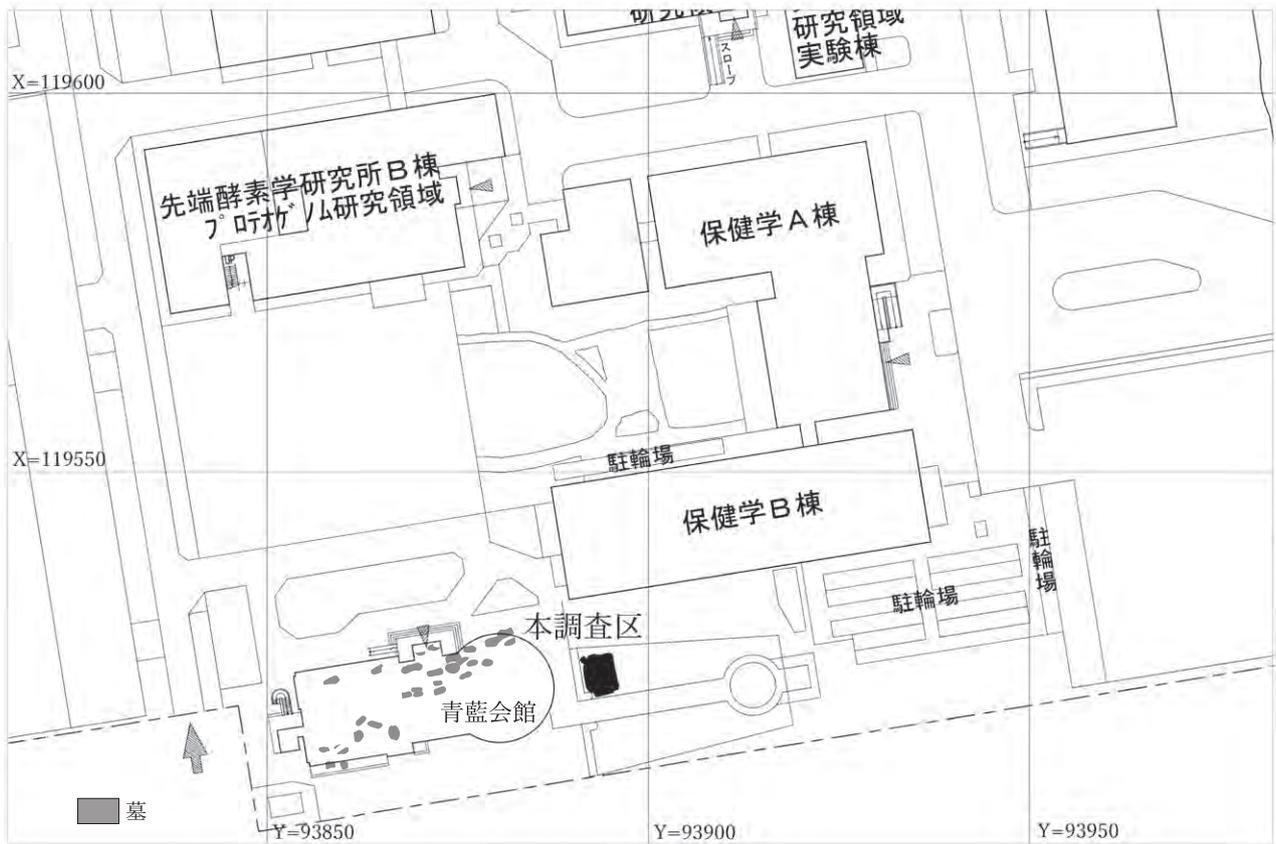


図3 第31次調査地点の位置

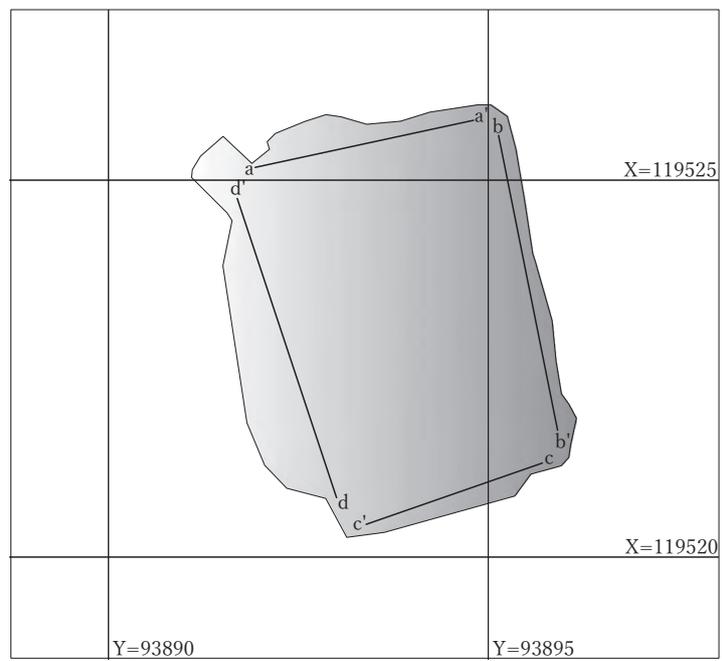
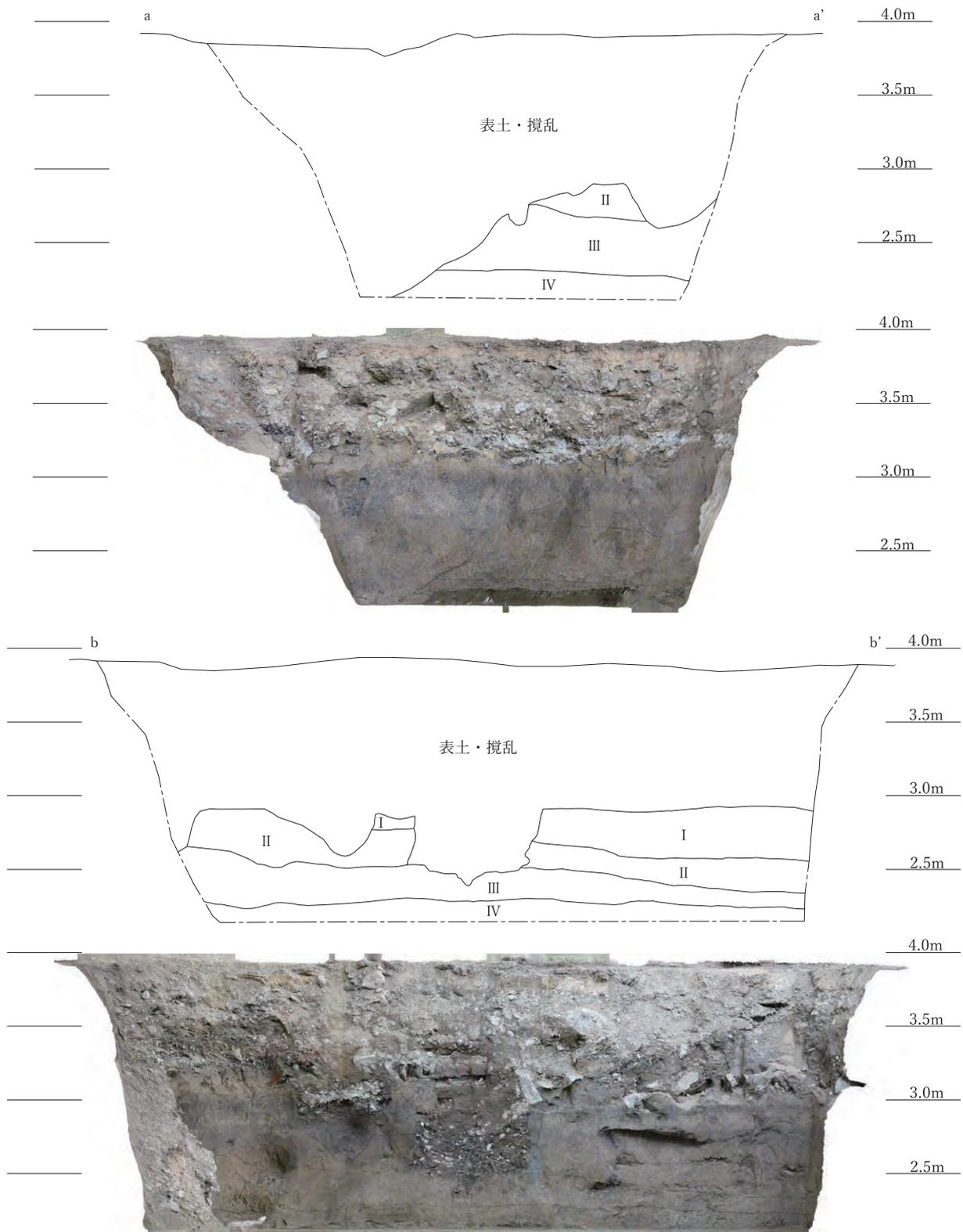
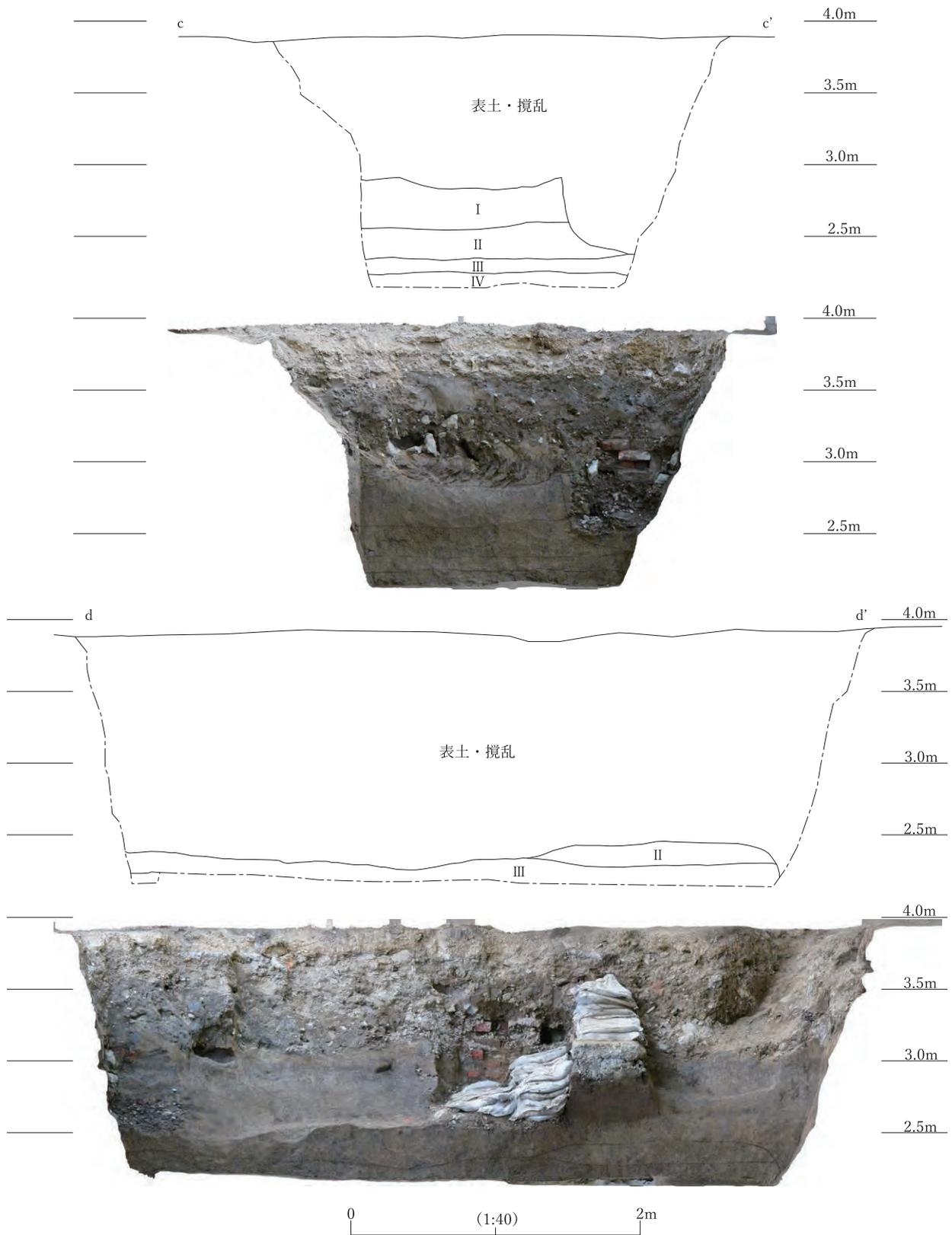


図4 第31次調査土層断面の位置



- I 明黄褐色 (10YR6/6) シルト 径2~5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土ブロックを縦縞状に多量、マンガンを多量含む しまり強い
- II にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト~細砂 径2~5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土ブロックを縦縞状に多量、マンガンを多量含む しまり弱い
- III にぶい黄褐色 (10YR6/4) 細砂 径2~5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土ブロックを縦縞状に多量、マンガンを多量含む しまり弱い
- IV にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂~中砂 径2~5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土ブロックを縦縞状に多量、マンガンを多量含む しまり弱い

図5 第31次調査土層断面(1)



- I 明黄褐色 (10YR6/6) シルト 径 2 ～ 5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土ブロックを縦縞状に多量、マンガンを多量含む しまり強い
- II にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト～細砂 径 2 ～ 5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土ブロックを縦縞状に多量、マンガンを多量含む しまり弱い
- III にぶい黄褐色 (10YR6/4) 細砂 径 2 ～ 5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土ブロックを縦縞状に多量、マンガンを多量含む しまり弱い
- IV にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂～中砂 径 2 ～ 5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土ブロックを縦縞状に多量、マンガンを多量含む しまり弱い

図 6 第 31 次調査土層断面 (2)



番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	層位
1	磨石	12.2	6.6	4.7	755.5	砂岩	重機掘削
2	用途不明石製品	3.9	3.0	0.6	11.2	頁岩	重機掘削

図7 第31次調査出土遺物

II層 におい黄褐色 (10YR5/4) シルト～細砂からなる。上面の標高は約 2.6m, 厚さは 20～30 cm を測る。

III層 におい黄橙色 (10YR6/4) 細砂からなる。上面の標高は 2.35～2.4m, 厚さは約 10 cm を測る。

IV層 におい黄褐色 (10YR5/4) 細砂～中砂からなる。上面の標高は 2.25～2.3m を測る。

以上の I～IV層は、堆積相と標高からみて、第6次調査地点の 10～13層にそれぞれ対応するものと考えられる。





1 調査地点全景・完掘状況（北西から）



2 調査地点全景・原状復帰後（南東から）



1 重機掘削時出土磨石  
2 重機掘削時出土用途不明石製品

## (2) 調査結果

本調査地点では、遺構は全く確認できなかった。近接する第6次調査地点では、7・9層上面（第1遺構面）で弥生時代中期～中世の遺構が、10層上面（第2遺構面）で弥生時代前期前葉～中葉の遺構が検出されている。本調査地点では、第6次調査地点7・9層対応層は攪乱を受け、消失しており、同地点10層に対応するI層もまたその多くが攪乱を受けていた。I層中に本来存在したはずの遺構が攪乱により消失した可能性も全くないわけではないが、攪乱を受けた事実を差し引いたとしても、弥生時代前期の遺物が全く出土しなかったことからみて、この地点は当該期の人間集団の痕跡が空白あるいは希薄であった可能性が高いように思われる。この想定が正しく、かつ第6次調査地点で確認された墓域がさらに東方へ広がるとすれば、それは本調査地点の北側に位置する現在の保健学B棟付近へと延びるものと理解されようか。

なお、攪乱には煉瓦やコンクリートからなる建物の基礎が含まれており、これは現在の蔵本キャンパス一帯が旧陸軍歩兵第43連隊の敷地であったときの建物（下士官集合所）（坂東1992）に関係するものと考えられる。この建物は、昭和43年5月には学生寮として再利用されていたことが、本学施設マネジメント部に保管された建物配置図より知ることができる。

遺物は、重機掘削時や清掃時に採集された数点のものにとどまる。これらは石製品・土器・鉄製品などからなるが、ここではそのなかでも図示し得た石製品2点を報告する。図7-1は、重機掘削時に出土した磨石である。砂岩製で、各面に擦痕と敲打痕を有する。弥生時代のものであろうか。図7-2は、重機掘削時に出土した用途不明石製品である。頁岩製で、表面は丁寧に磨かれている。近世の基石のようにも思われるが、弥生土器のミガキ具の可能性はないであろうか。

## C まとめ

本調査地点では、残念ながら、調査の目的である弥生時代前期前葉～中葉に属する墓の存在は、確認できなかった。しかし、結果として、墓域は本調査地点より北側に展開した可能性があることが判明したことが成果といえよう。この成果はもちろん、庄・蔵本弥生時代前期集落の復元研究に寄与するものである。ただ、もし今後、本稿で示した目的に沿った調査を効果的に遂行するつもりならば、本調査地点付近でなく、あらためて別の調査地点を選定したうえでの実施が望まれよう。

## III 第32次調査（給水設備地点）

### A 調査に至る経緯・経過

#### (1) 調査に至る経緯

2018年度、蔵本キャンパスの北西部に位置する地点に、給水設備を設置することとなった（図2）。それ以前に、設置予定地北側では弥生時代前期中葉の用水路、中世の旧河道（第26次調査）、北東側では中世の旧河道（第25次調査）、弥生時代後期の自然流路（第12次調査）、東側では弥生時代前期中葉の用水路と小畦畔、弥生時代終末期の土坑、10世紀ごろの溝（第19次調査）、南側では中世～近世の溝、弥生時代後期後葉～終末期の自然流路（第21次調査）、西側では中世～近世の畑跡、古代の溝（第14次調査）などが検出されていた。そのため、これらに関係する遺構・遺物が、予定地の範囲



図 8 第 32 次調査作業風景

まで広がっている可能性を想定し得た。そこで、設置工事に先立って、調査員 1 名による発掘調査を実施した（図 8）。調査面積は 134 m<sup>2</sup>、調査期間は 2018 年 7 月 31 日～9 月 5 日である。

## (2) 調査の体制

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）

調査員 端野晋平

調査補助員 久米淑子，板東美幸，前田千夏，山本愛子（施設マネジメント部・技術補佐員）

## (3) 調査の経過

7 月 31 日より、調査区南側（以下、南区と称する）の重機掘削を開始した。掘削は GL - 1.0 ～ 1.2m 辺りの灰色粘土層まで行い、8 月 2 日に完了した。8 月 6 日、器材を搬入し、人力掘削を開始した。茶褐色シルト層上面（標高約 1.73m）を第 1 遺構面とし、上位の包含層を掘削した。8 日には掘削作業を完了し、遺構面を精査した。その結果、流路の一部とみられる SD01 を検出した。同日より SD01 の掘削を開始したが、湧水のため、完掘を断念し、掘削は標高 1.50m 付近までとした。9 日、SD01 の掘削作業を完了した。掘削作業に並行して、出土遺物の位置情報をトータルステーションで記録した後、遺物を取り上げた。その後、南区全体を清掃し、写真を撮影した。10 日は調査区壁の土層断面図を作成した。あわせて、明黄褐色シルト層上面を第 2 遺構面とし、包含層を掘削した。つづいて、第 2 遺構面の完掘状況の写真撮影と、トータルステーションによる測量を終え、南区の調査を完了した。

8月20日より、調査区北側（以下、北区と呼称する）の重機掘削を開始し、21日に完了した。27日より、人力による第1遺構面までの掘削を開始した。29日に掘削を完了し、遺構面を精査した。その結果、南区で検出されたSD01の続きを検出した。その後、SD01の掘削を開始した。9月3日、SD01の掘削を完了し、北区全体を清掃後、写真を撮影した。あわせて、トータルステーションによる測量を行った。つづいて、第2遺構面への掘削と同遺構面の精査を行い、結果としてSK02を検出した。同日にSK02を完掘し、その写真を撮影した。9月5日はトータルステーションによる測量を行った。同日をもってすべての作業を完了した。

## B 調査の記録

### (1) 基本層序（図9～12）

本調査地点での基本土層は5層に分けられる。以下、南区d-d'の土層断面（図10下）にもとづいて詳述する。なお、現地表面は標高3.30～3.35mである。

- 1層 褐灰色（10YR6/1）シルトからなる。上面の標高は2.70～2.80m、厚さは10～15cmを測る。
- 3層 にぶい黄橙色（10YR6/3）シルトからなる。上面の標高は2.60～2.80m、厚さは30～70cmを測る。
- 7層 灰黄褐色（10YR4/2）シルトからなる。上面の標高は約2.10m、厚さは約35cmを測る。
- 9層 褐灰色（10YR5/1）細砂からなる。上面の標高は1.75～1.85mを測る。
- 10層 にぶい黄褐色（10YR5/4）シルトからなる。上面の標高は1.75mを測る。

以上の層は、これまでの周辺地点の調査成果（中村2000ほか）からみて、1層は近世の水田層、3層は中世～近世の堆積層、7・9・10層は弥生時代前期末葉の「黄褐色細砂層」に、それぞれ対応するものと考えられる。本調査地点では、7層上面～中位を第1遺構面、9・10層上面を第2遺構面として調査を実施した。

### (2) 遺構と遺物

本調査地点では、第2遺構面で土坑1基、第1遺構面で10世紀後葉～11世紀前葉の流路1条が調査された（図13・14）。以下、遺構面ごとに詳述する。

#### 【第2遺構面】

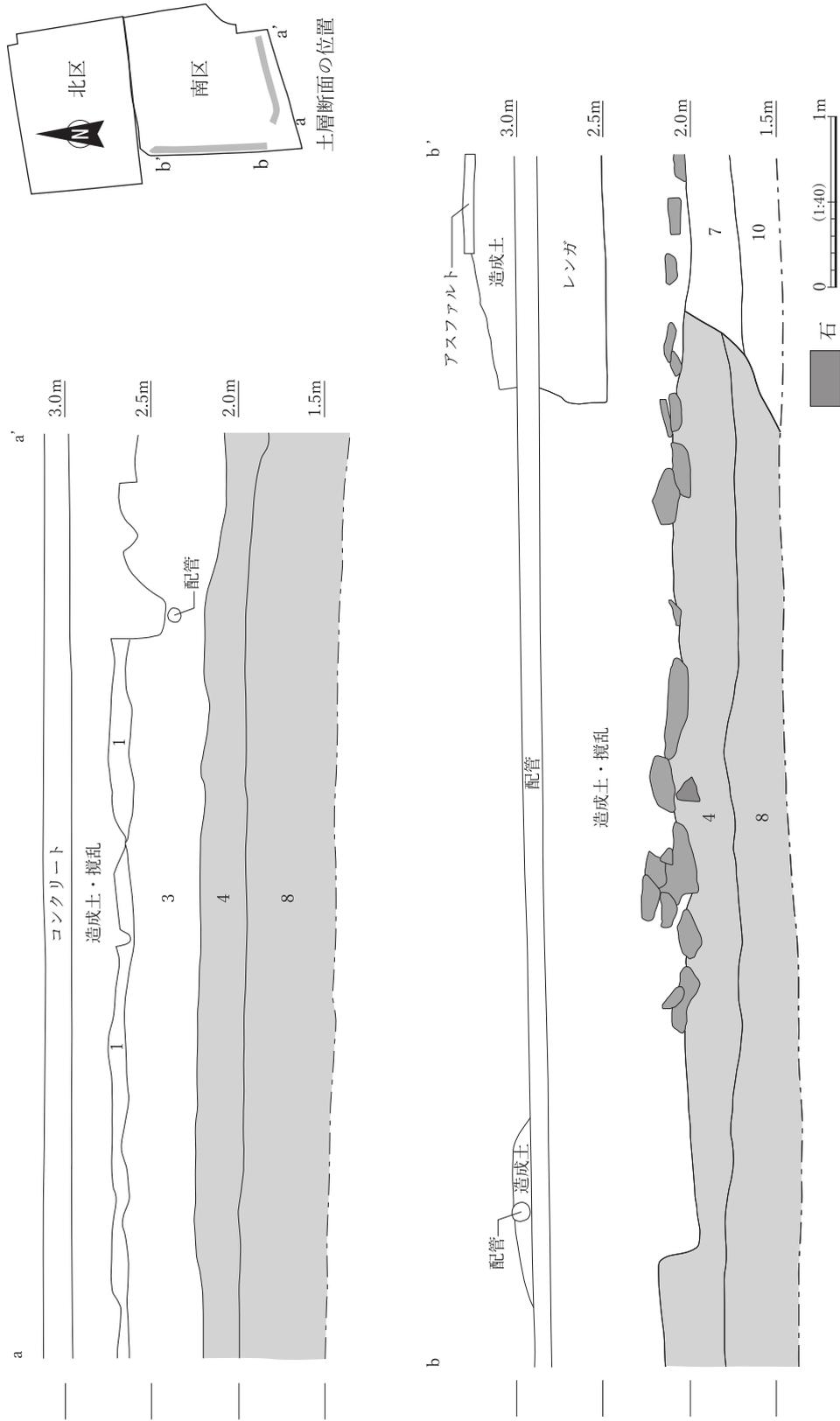
##### SK02（図15）

北区の中央部で検出された土坑である。攪乱により北側は破壊されており、正確な平面形は不明であるが、残存部で舟形を呈している。東西長は3.1m、南北長は残存部位で0.8mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは検出面から約0.1mを測る。埋土は細砂の単一層からなる。内部から遺物は出土しなかった。本遺構は検出層位からみて、弥生時代前期末葉～10世紀後葉のあいだの一時期に属するものと考えられる。

#### 【第1遺構面】

##### SD01（図13・14）

北区の南東部、南区のほぼ全域で検出された流路である。北区の南側中央部から南区の北西端部にかけてで、流路の肩が検出された。幅が8m以上になることは間違いない。深さは湧水のため、完掘できず不明である。埋土は4層からなり、肩部付近に黄褐色系統のシルトが、全域には灰色系統のシルトあるいは粘土が堆積する。内部からは、土師器と須恵器が出土した（図16）。土師器には皿（1）と坏（2～8）がある。いずれも回転ナデ調整、底部回転へら切りを基本とする。時期は、後述するように、第



- 1 褐灰色 (10YR6/1) シルト 鉄分多量含む
  - 3 にぶい黄褐色 (10YR6/3) シルト 鉄分・マンガン多量含む
  - 4 青灰色 (10BG5/1) シルト
  - 7 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト 鉄分・マンガン多量含む
  - 8 灰色 (N5/) 粘土
  - 10 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト 鉄分・マンガン多量含む  
径 1~5cm 褐灰色 (10YR5/1) シルトブロック多量含む
- 1・3・7・10 基本土層  
4・8 SD01埋土

図9 第32次調査土層断面(1)

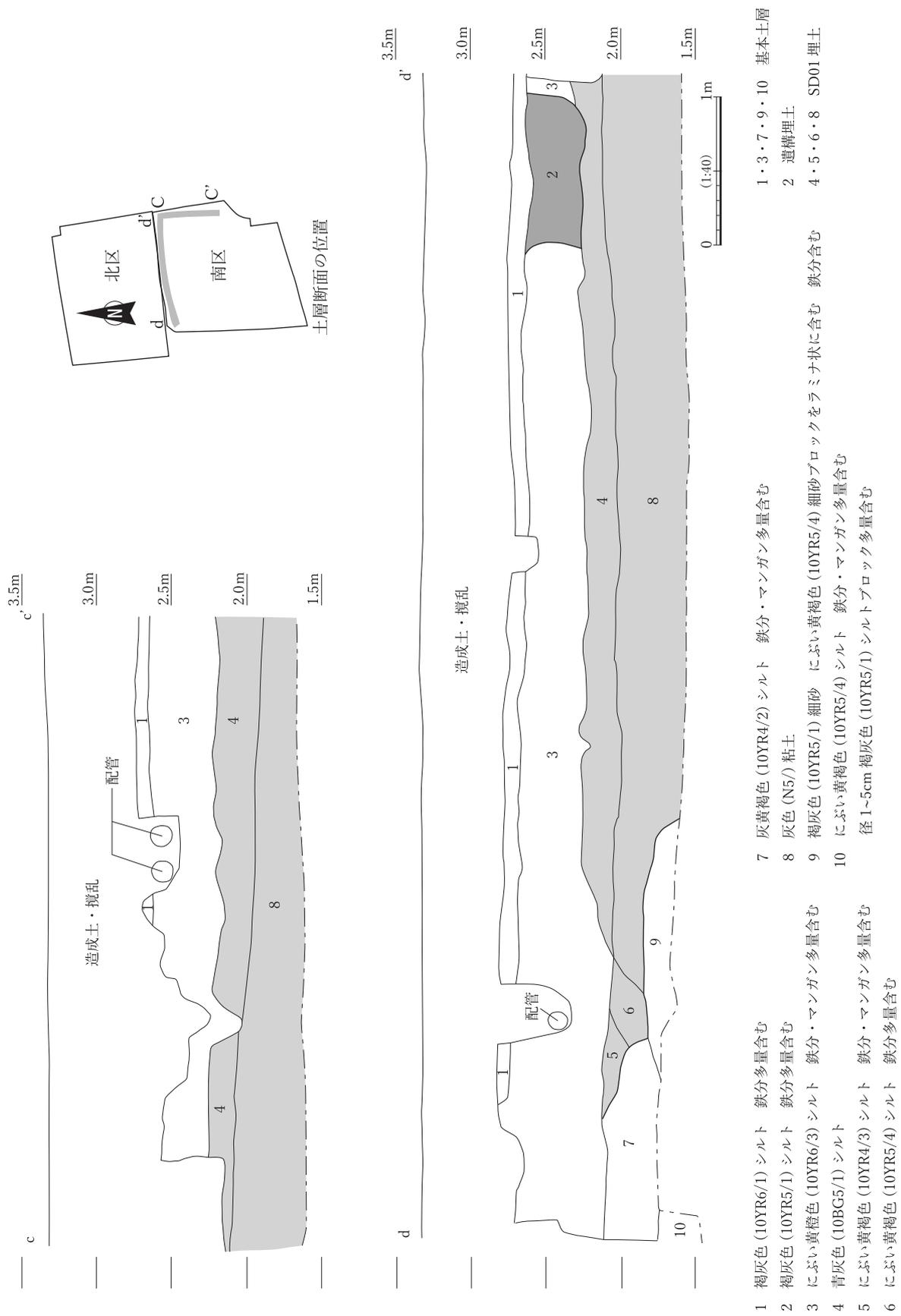


図 10 第 32 次調査土層断面 (2)

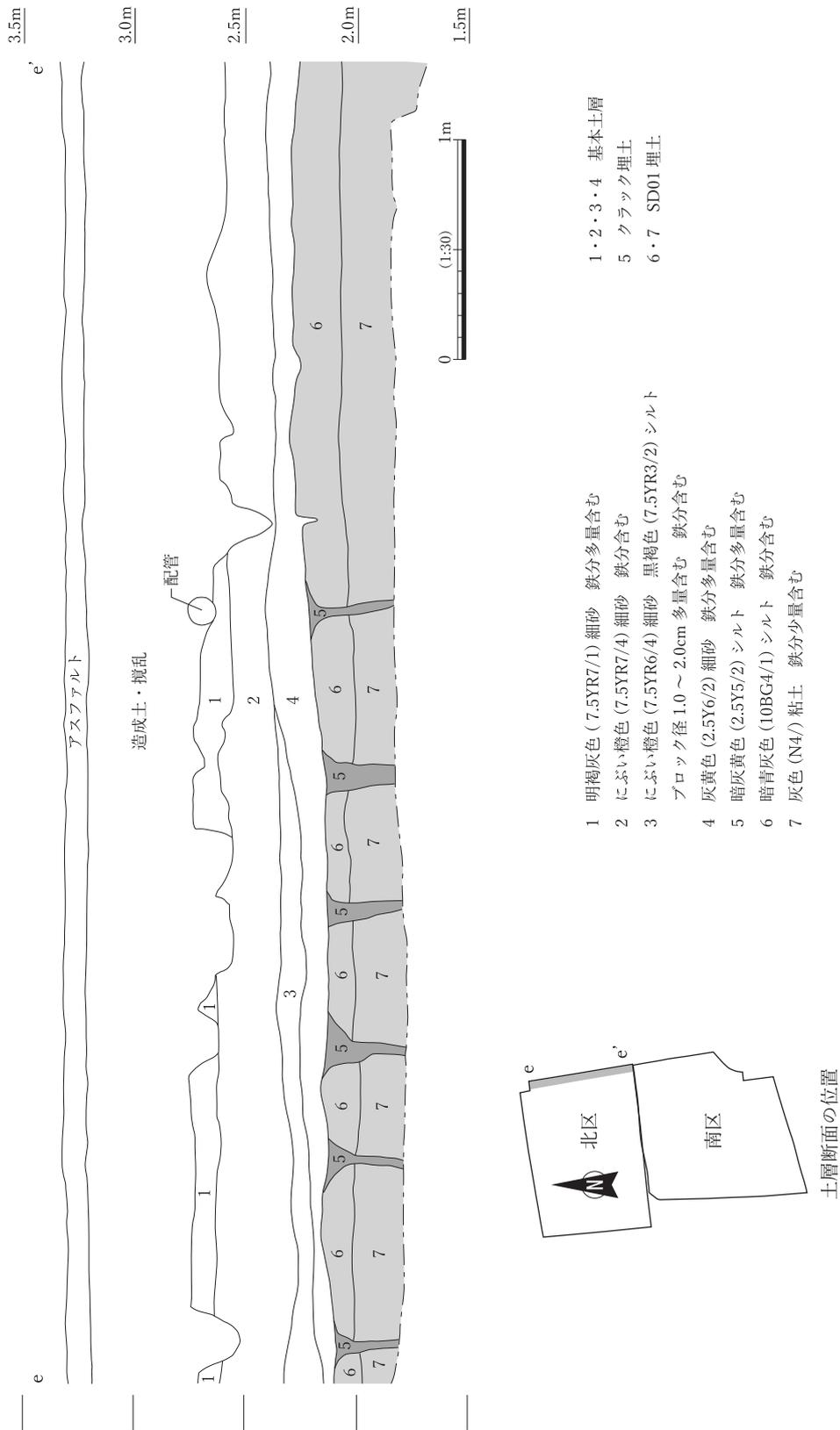


図 11 第 32 次調査土層断面 (3)



③南区第2遺構面完掘状況

写真撮影の位置・方向

②北区 e-e' 土層断面

図 12 第 32 次調査土層断面および第 2 遺構面完掘状況写真

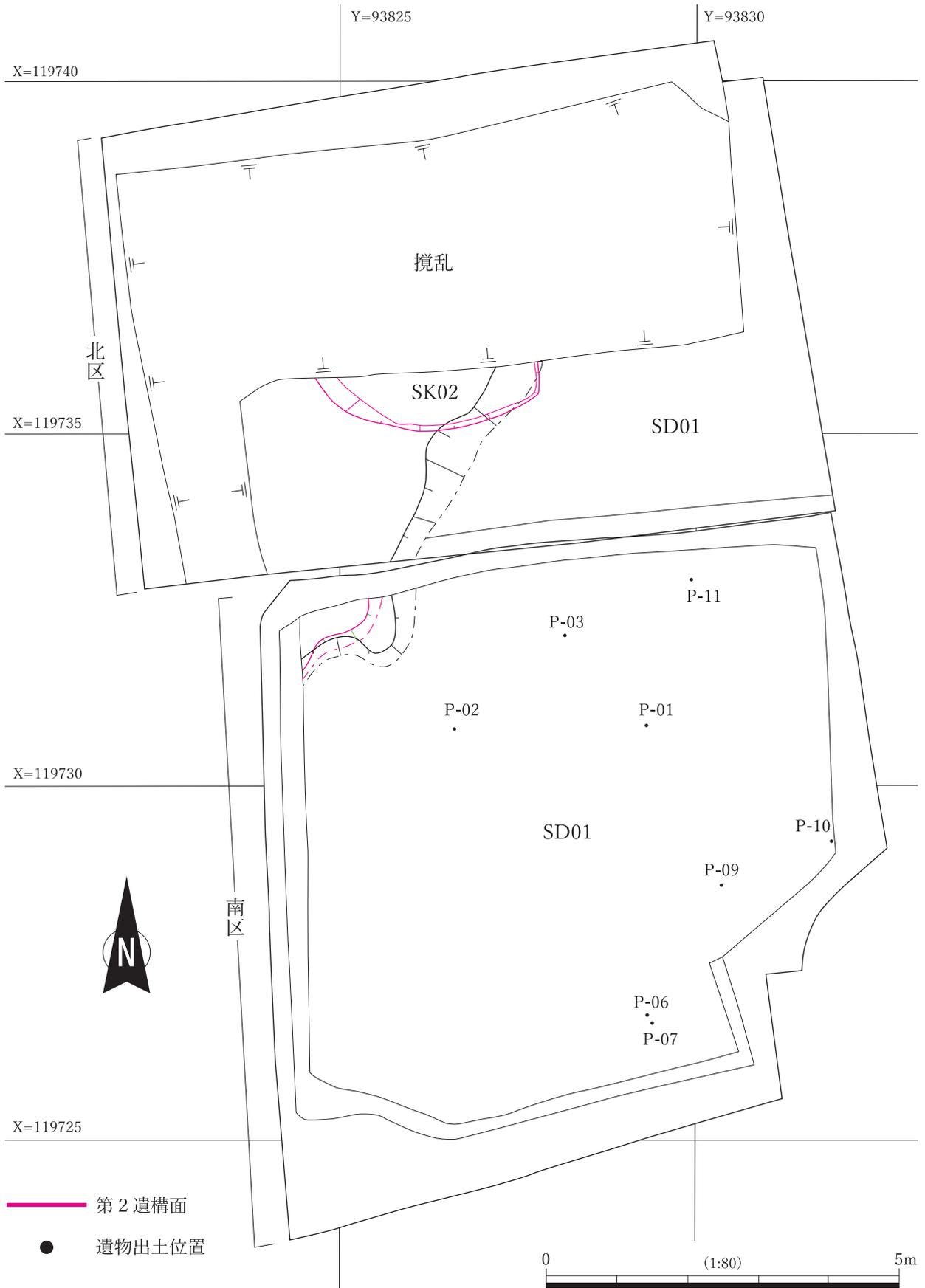


图 13 第 32 次調査遺構全体図

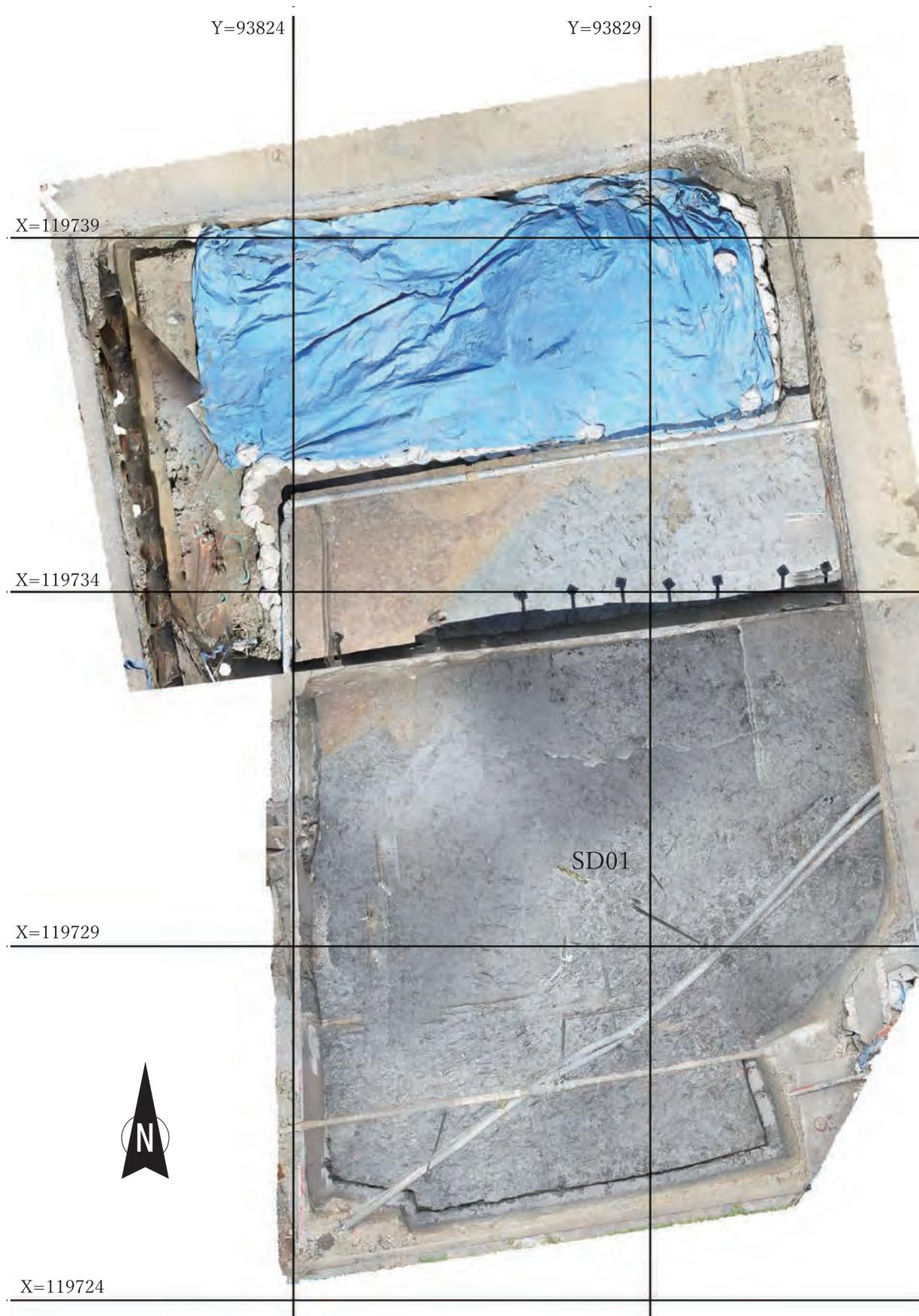


図 14 第 32 次調査遺構全体オルソ写真

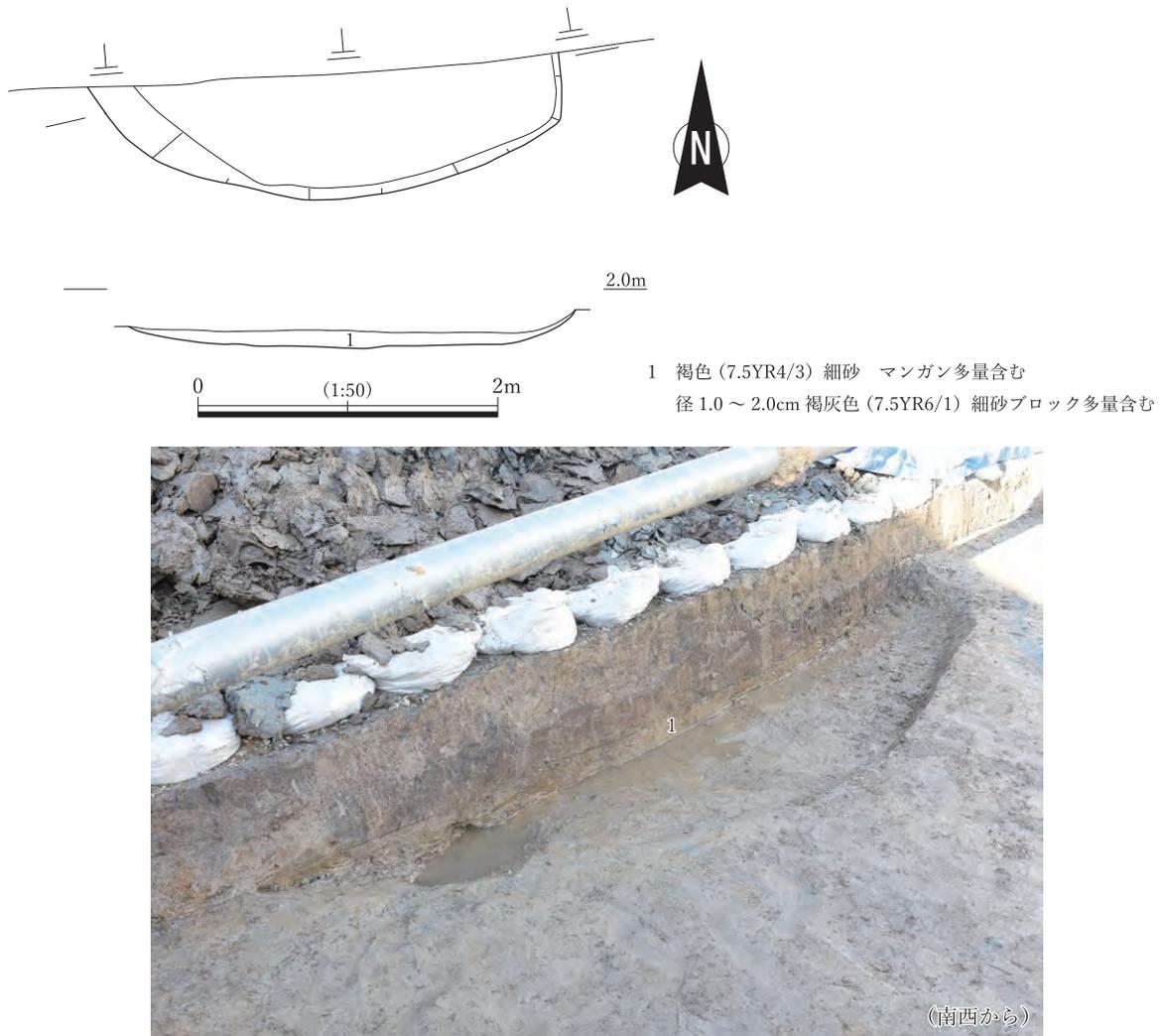


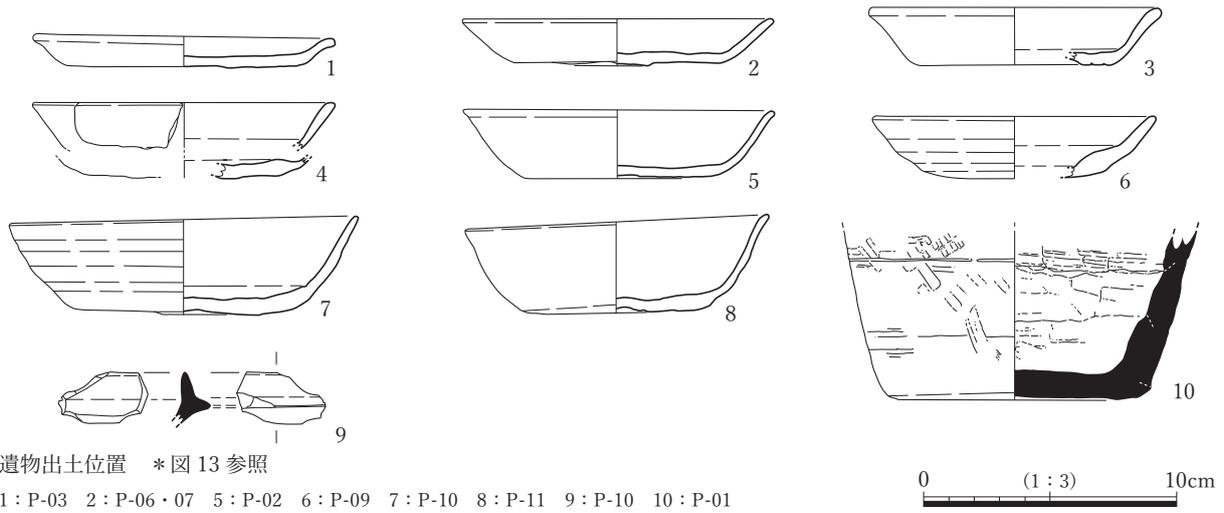
図 15 第 32 次調査 SK02

2次調査(体育館地点)水路 201 の土器群(定森・中村編 2005)に対応し, 平安時代にあたる 10 世紀後葉～11 世紀前葉のものと考えられる。9 は須恵器蓋坏(身)の口縁部片である。TK43(古墳時代後期後葉)と思われる。10 は古代の須恵器壺の底部片である。本遺構は, 出土遺物, 検出層位, 体育館地点での調査成果からみて, 遅くとも 10 世紀後葉には掘削され, 11 世紀前葉にかけて埋没したと考えられる。

なお, 本遺構の北区側では, 埋土にいくつかのクラックが認められた(図 11・図 12 左下)。遺構内に 6 層が堆積した後, 6・7 層といった埋土が乾燥することで収縮し, クラックが生じたものとみられ, さらにその後, クラック内に 5 層が堆積したものと考えられる。

### (3) 包含層出土遺物(図 17)

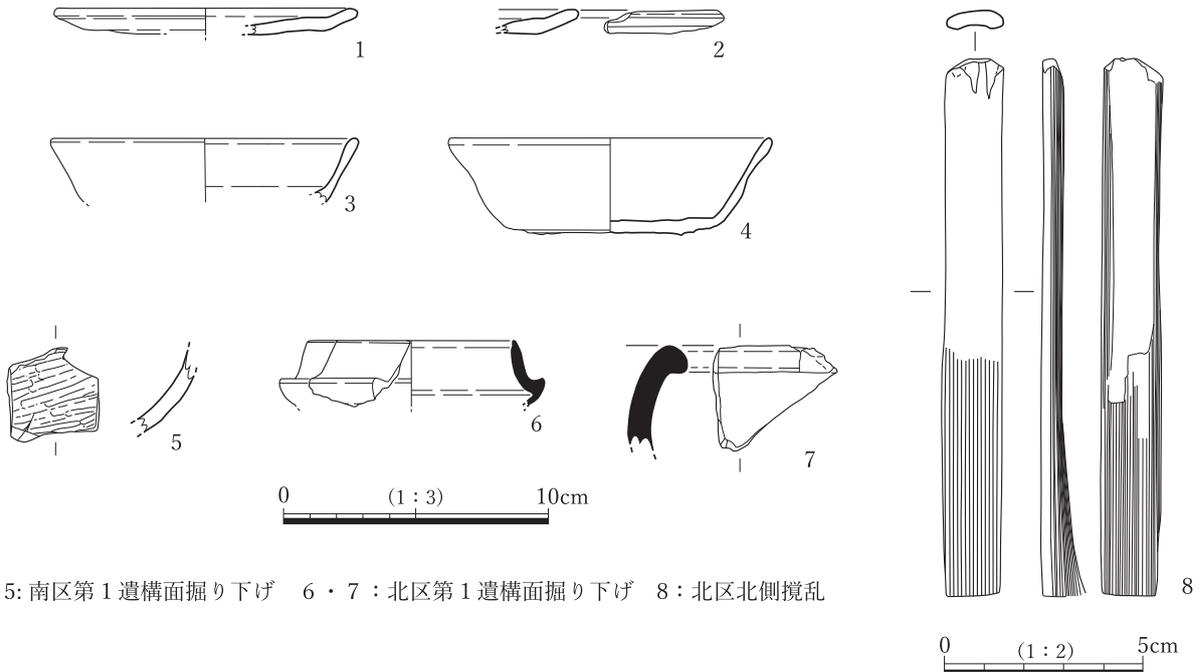
包含層からは, 土器と木製品が出土した。土器には, 土師器, 黒色土器, 須恵器がある。1・2 は土師器皿, 3・4 は土師器坏, 5 は黒色土器 B 類碗である。6 は須恵器蓋坏(身)の口縁部片で, TK10(古墳時代後期中葉)と思われる。7 は古代の須恵器壺の口縁部片である。いずれも第 1 遺構面掘り下げ時に取り上げられたものであるが, 本来は SD01 に帰属するものとみてよからう。8 は竹製の刷毛である。攪乱からの出土で, 時期は不明である。



遺物出土位置 \*図13参照

1:P-03 2:P-06・07 5:P-02 6:P-09 7:P-10 8:P-11 9:P-10 10:P-01

図16 第32次調査SD01出土遺物



1~5:南区第1遺構面掘り下げ 6・7:北区第1遺構面掘り下げ 8:北区北側攪乱

図17 第32次調査包含層出土遺物

### C まとめ

本調査地点で検出されたSD01は、南西側に位置する第2次調査（体育館地点）（定森・中村編2005）、第3次調査（課外活動共用施設地点）（中村編2011）で確認された流路の続きにあたるものと推定される（図18）。第2次調査地点の水路201は、「眉山からの谷川ないし鮎喰川の伏流水に人工的な改変を加えた用水路」とされ（定森・中村編2005）、そこから出土した土器群は、これまでの徳島県域における土器の編年研究（勝浦1992、早淵1994・1999）では、10世紀後葉～11世紀前葉の基準一括資料に位置づけられている。SD01では、その時期に特徴的な足高高台付皿は出土しなかったものの、

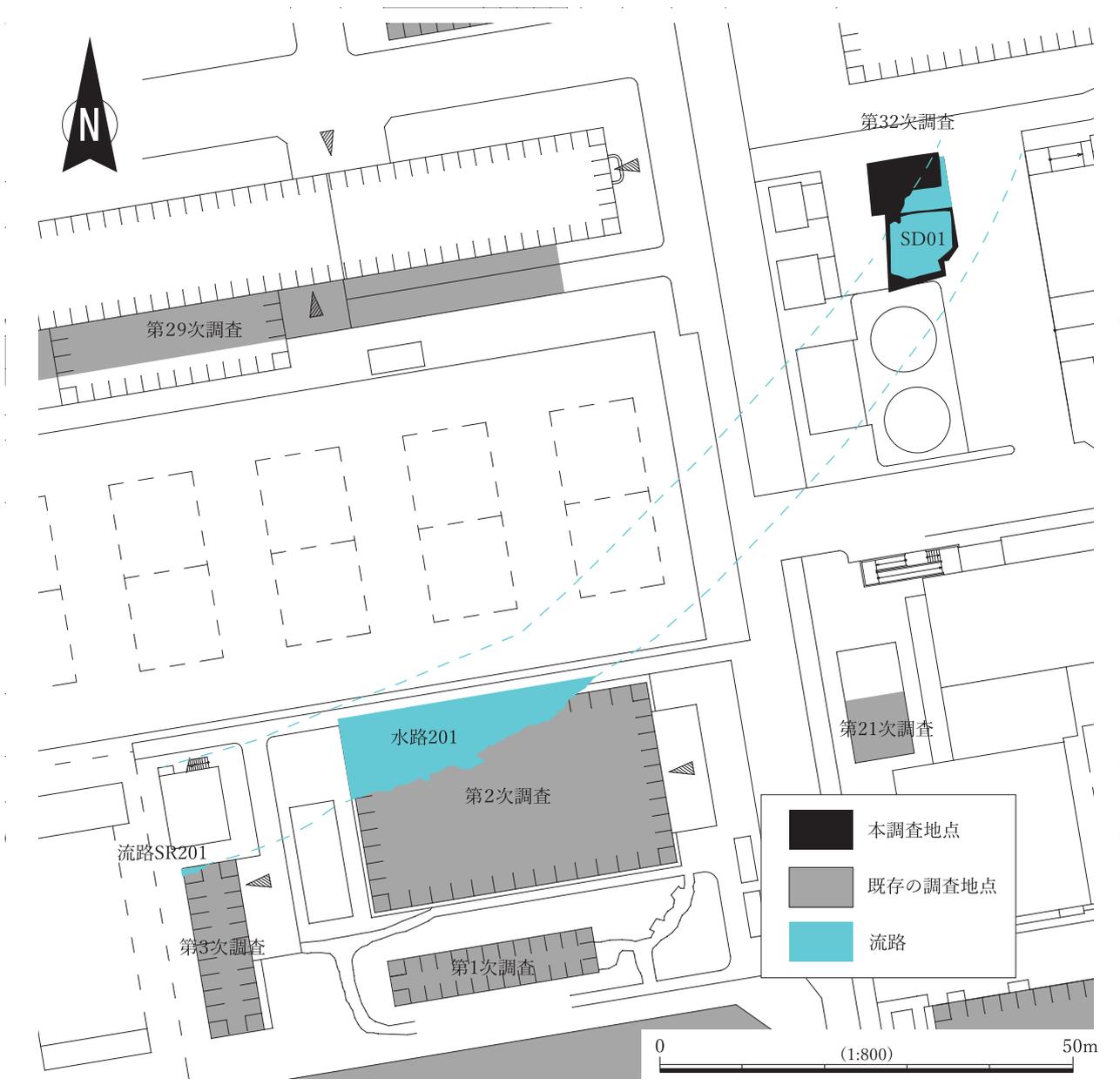


図 18 第 32 次調査地点付近の古代流路

土師器の特徴や黒色土器 B 類碗の存在は、この時期の土器群全体の特徴との間に矛盾はない。このように、古代における土地利用、景観の復元に寄与する、有益な情報が得られた点に、本調査の意義をおきたい。

#### IV 第 33 次調査（病院福利厚生施設地点）

##### A 調査に至る経緯・経過

###### (1) 調査に至る経緯

2018 年度、蔵本キャンパス北東部に位置する、旧外来診療棟で、倉庫棟として利用されていた西棟を取り壊し、病院福利厚生施設を建設することが計画された（図 2）。それまでに、建設予定地西側で



図 19 第 33 次調査作業風景

は中世の自然流路（第 25 次調査）、弥生時代後期の自然流路（第 12 次調査）、南側では弥生時代前期中葉の水田（第 19・24 次調査）、用水路、弥生時代終末期の土坑、10 世紀ごろの溝（第 19 次調査）、弥生時代前期中葉の溝状遺構（第 30 次調査）、南東側では古墳時代初頭の溝（第 11 次調査）、弥生時代前期中葉の水田（第 28 次調査）が検出されていた。そのため、これらに關係する遺構・遺物が、予定地の範囲まで広がっている可能性を想定し得た。そこで、建設工事に先立って、調査員 1 名による発掘調査を実施した（図 19）。調査面積は 1490 m<sup>2</sup>、調査期間は 2018 年 9 月 6 日～12 月 13 日である。

## (2) 調査の体制

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）

調査員 端野晋平

調査補助員 岸本多美子、久米淑子、中原尚子、板東美幸、前田千夏、山本愛子（施設マネジメント部・技術補佐員）

## (3) 調査の経過

9 月 6 日、重機による既存基礎の撤去作業を開始し、21 日までに同作業を終えた。22 日より、作業員を動員し、人力掘削を開始した。調査区の区割りは、南よりⅠ区（最南部）・Ⅱ区（中央東部）・Ⅲ区（中央西部）・Ⅳ区（最北部）とし、以後、Ⅰ区より調査を開始した。Ⅰ区は度重なる雨と湧水のため、地盤がゆるんだことにより、最初の約 2 週間は重機を調査区内に入れることができず、造成土の除去作業

に多くの時間を要したが、10月26日には全体写真の撮影を終え、調査を完了した。この日より、調査の中心をⅡ区に移し、同区の造成土の掘り下げを開始した。29日、Ⅱ区の調査に並行して、Ⅲ区での掘削作業を開始した。11月2日、Ⅱ区第1遺構面（明黄褐色極細砂層上面）完掘状況の写真撮影した。6日、建設業者より工程上、先にⅢ区を埋め戻したいとの申し出があり、Ⅱ区の調査をいったん保留し、調査の中心をⅢ区に移した。14日、Ⅲ区南半完掘状況の写真撮影した。同日、Ⅱ区の調査を再開した。16日、Ⅲ区北半完掘状況の写真撮影し、同区の調査を完了した。20日、Ⅱ区の調査と並行して、Ⅳ区の調査を開始した。22日、Ⅱ区第2遺構面（茶褐色極細砂層上面）SK028の底面より人骨が出土した。同日、茶褐色極細砂層の掘り下げを開始した。24日、SK028の調査を完了した。26日、Ⅱ区第3遺構面（灰色極細砂層上面）の調査を継続しつつ、同区の灰色極細砂層の掘り下げを開始した。あわせて、Ⅳ区の調査を再開した。27日、Ⅱ区第3遺構面の調査を完了した。28日、Ⅱ区灰色極細砂層下の灰色シルト層上面では明確な遺構を検出し得ず、灰色シルト層の掘り下げと、その下の暗灰色粘土層上面の精査を行った。29日、Ⅱ区第4遺構面（暗灰色粘土層上面）の完掘状況の写真撮影をもって、同区の調査を完了した。12月10日、Ⅳ区SD026の掘削を開始した。12日、SD026を完掘し、全体写真を撮影した。13日、器材の搬出をもって、すべての作業を完了した。

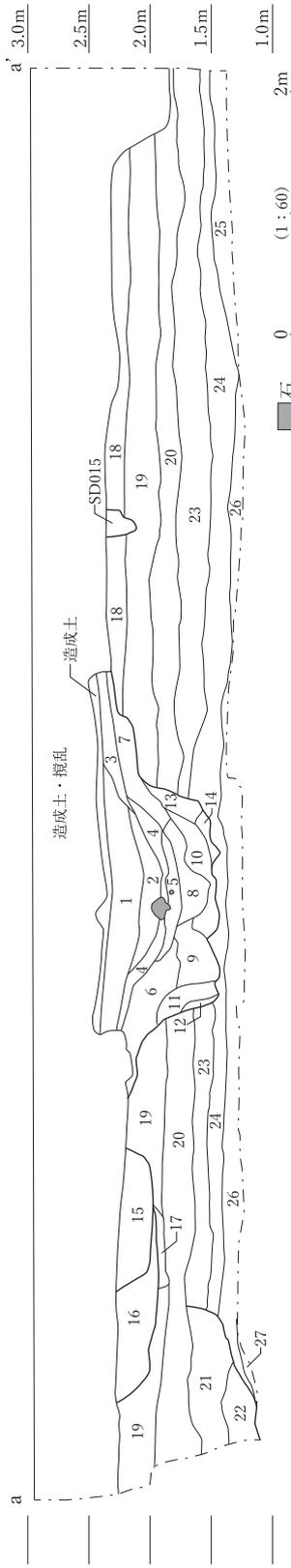
## B 調査成果

### (1) 基本層序

Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区は旧外来診療棟の基礎工事により、上部の包含層のほとんどが破壊されていたが、中庭部分にあたるⅡ区は近世以前の包含層がほぼ無傷のまま残存していた。そこで、Ⅱ区東壁の土層断面(図20)にもとづいて、本調査地点の基本土層を詳述することとする。基本土層は以下の8層に分けられる。

- 18層 浅黄色(2.5Y7/4)極細砂からなる。上面の標高は2.25～2.40m、厚さは10～20cmを測る。
- 19層 にぶい黄色(2.5Y6/4)極細砂からなる。上面の標高は約2.20m、厚さは20～30cmを測る。
- 20層 にぶい黄橙色(10YR6/3)極細砂からなる。上面の標高は1.90～2.00mを測る。厚さは10～40cmを測る。
- 23層 明黄褐色(2.5Y7/6)極細砂からなる。上面の標高は1.60～1.80mを測る。厚さは10～30cmを測る。
- 24層 オリーブ黄色(5Y6/3)極細砂からなる。上面の標高は1.50～1.70m、厚さは10～30cmを測る。
- 25層 オリーブ灰色(5GY6/1)シルトからなる。上面の標高は1.30～1.50mを測る。
- 26層 黄灰色(2.5Y5/1)粘土からなる。上面の標高は1.30～1.45m、厚さは約20cmを測る。
- 27層 オリーブ灰色(10Y5/2)粘土からなる。上面の標高は1.15～1.30mを測る。

周辺地点で得られた層位学的所見(中村2000ほか)からみて、18・19層は近世の堆積層、20層は弥生時代前期末～中世の「黒褐色土層」、23・24層は弥生時代前期中葉～前期末の「黄褐色細砂層」、25・26層は弥生時代前期の遺構が掘り込まれる「暗褐色粘質土」と判断される。Ⅱ区では、18／19層・20層・23層・24層・25／26層の上面で計5回の精査を実施し、そのうち24層を除いた各層の上面で遺構を検出し得た。以下、18／19層上面を第1遺構面、20層上面を第2遺構面、23層上面を第3遺構面、25／26層上面を第4遺構面として報告する。Ⅰ区は24～26層対応層、Ⅲ・Ⅳ区は25・26層対応層のそれぞれ上面で精査した結果、検出された遺構を報告する。



- 1 明オリーブ灰色 (5GY7/1) シルト 鉄分含む
- 2 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極細砂 木片多量含む
- 3 灰白色 (7.5Y7/2) 極細砂
- 4 オリーブ黄色 (5Y6/3) 極細砂
- 5 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細砂 径1~5 cm礫多量含む 炭化物少量含む
- 6 緑灰色 (10G6/1) シルト
- 7 オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト
- 8 灰白色 (5Y7/2) 極細砂 鉄分少量含む
- 9 オリーブ黄色 (7.5Y6/3) シルト
- 10 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト 鉄分含む
- 11 緑灰色 (10GY6/1) シルト 鉄分多量含む
- 12 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト 鉄分含む
- 13 オリーブ黄色 (7.5Y6/3) シルト 鉄分多量含む
- 14 オリーブ灰色 (10Y6/2) シルト 鉄分含む
- 15 灰白色 (7.5Y7/1) シルト 鉄分含む
- 16 灰白色 (7.5Y7/2) シルト 鉄分含む
- 17 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細砂 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂多量含む 鉄分含む
- 18 浅黄色 (2.5Y7/4) 極細砂 マンガン多量含む
- 19 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細砂 マンガン多量含む
- 20 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 極細砂 マンガン多量含む
- 21 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 極細砂 鉄分含む
- 22 灰黄色 (2.5Y6/2) 細砂 木片多量含む
- 23 明黄褐色 (2.5Y7/6) 極細砂 鉄分含む マンガン多量含む
- 24 オリーブ黄色 (5Y6/3) 極細砂 鉄分多量含む
- 25 オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト 鉄分含む
- 26 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土 鉄分多量含む
- 27 オリーブ灰色 (10Y5/2) 粘土 鉄分多量含む

18~20, 23~27: 基本土層 1~14: SD014 15: SK020 16: SK023 21~22: SD026 17: 遺構

オルゾ写真



図20 第33次調査II区土層断面

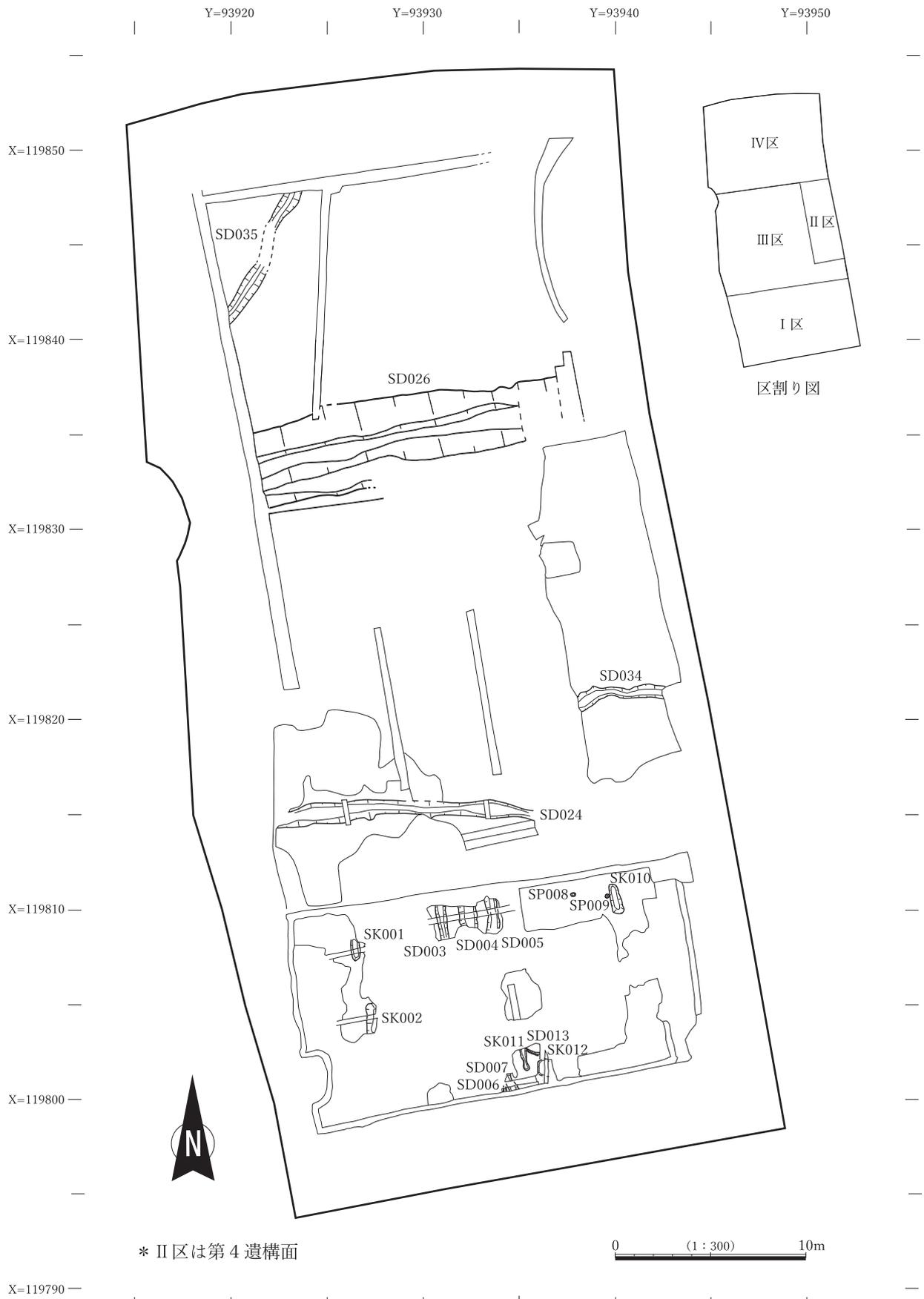


図 21 第 33 次調査遺構全体図

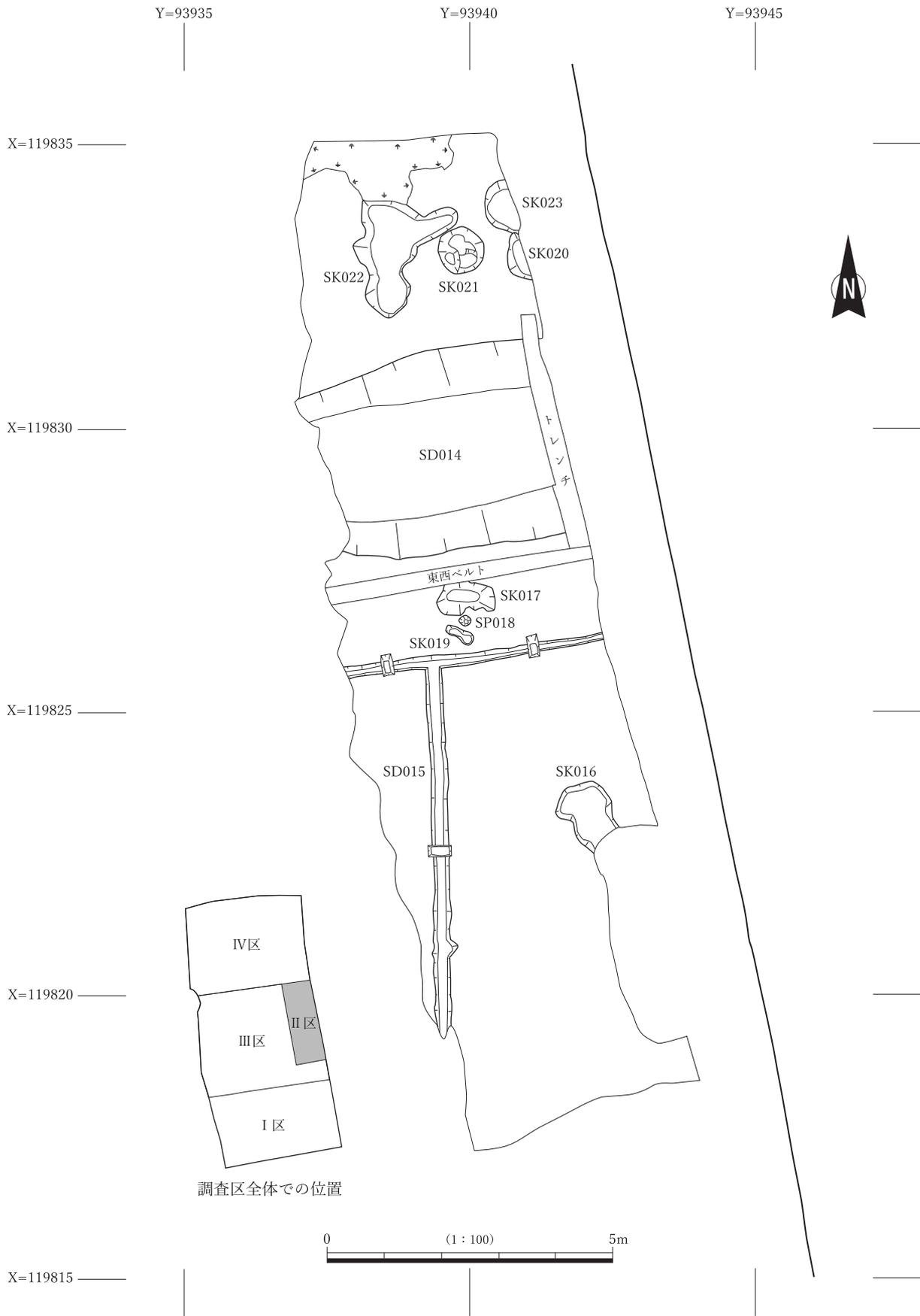


図 22 第 33 次調査 II 区第 1 遺構面検出遺構

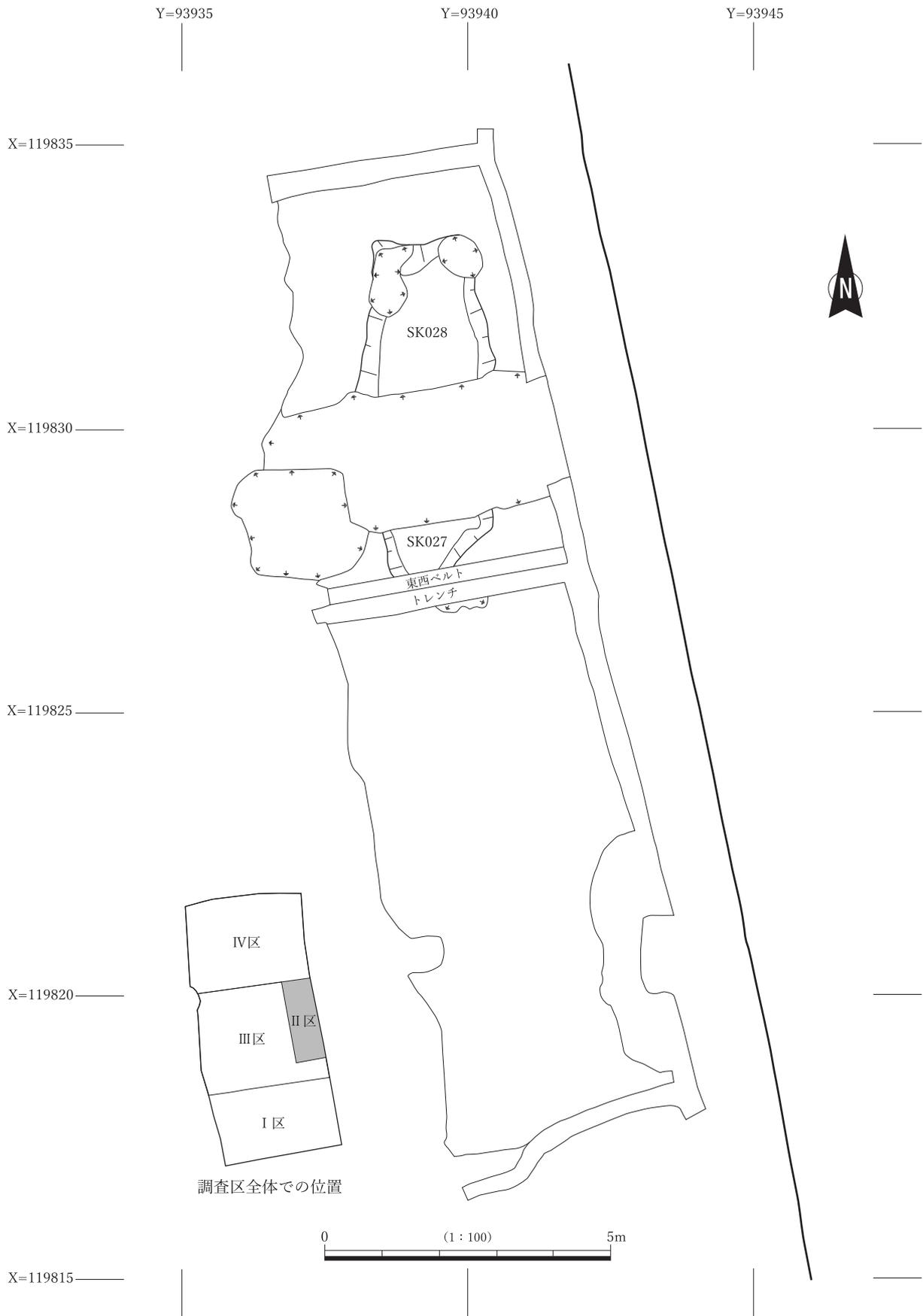


図 23 第 33 次調査 II 区第 2 遺構面検出遺構

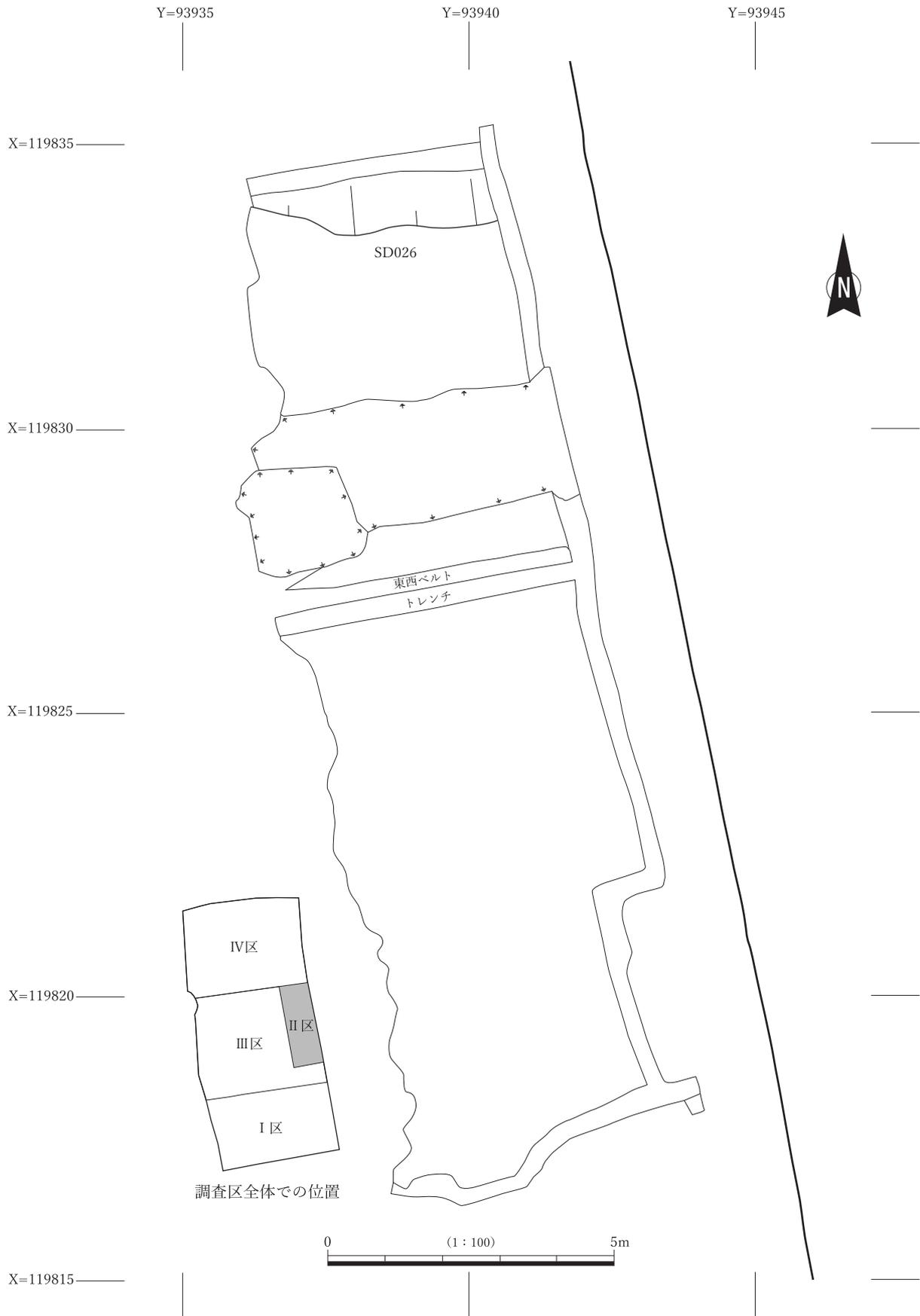


図 24 第 33 次調査 II 区第 3 遺構面検出遺構



図 25 第 33 次調査 II 区第 4 遺構面検出遺構

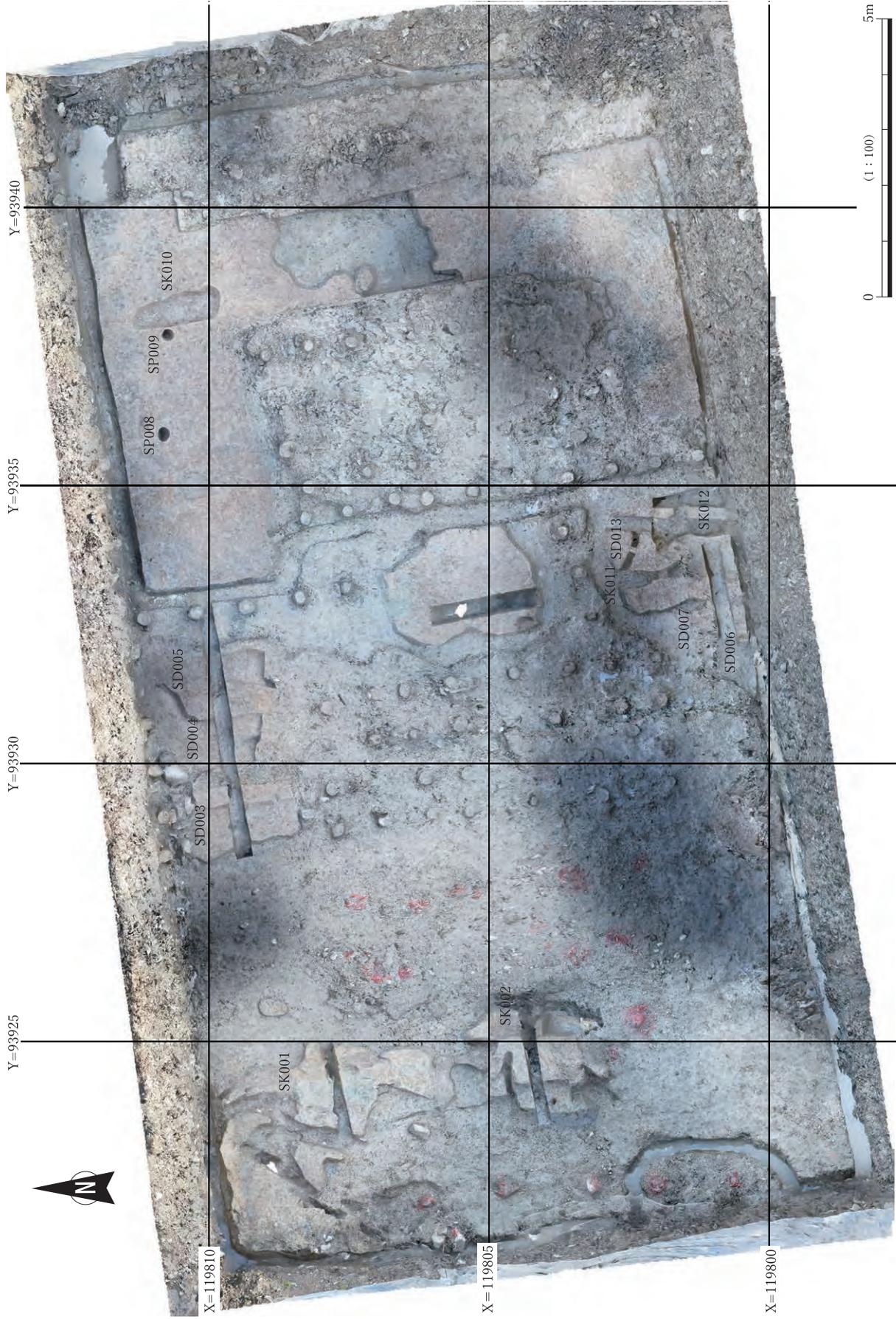


図 26 第 33 次調査 I 区オルソ写真

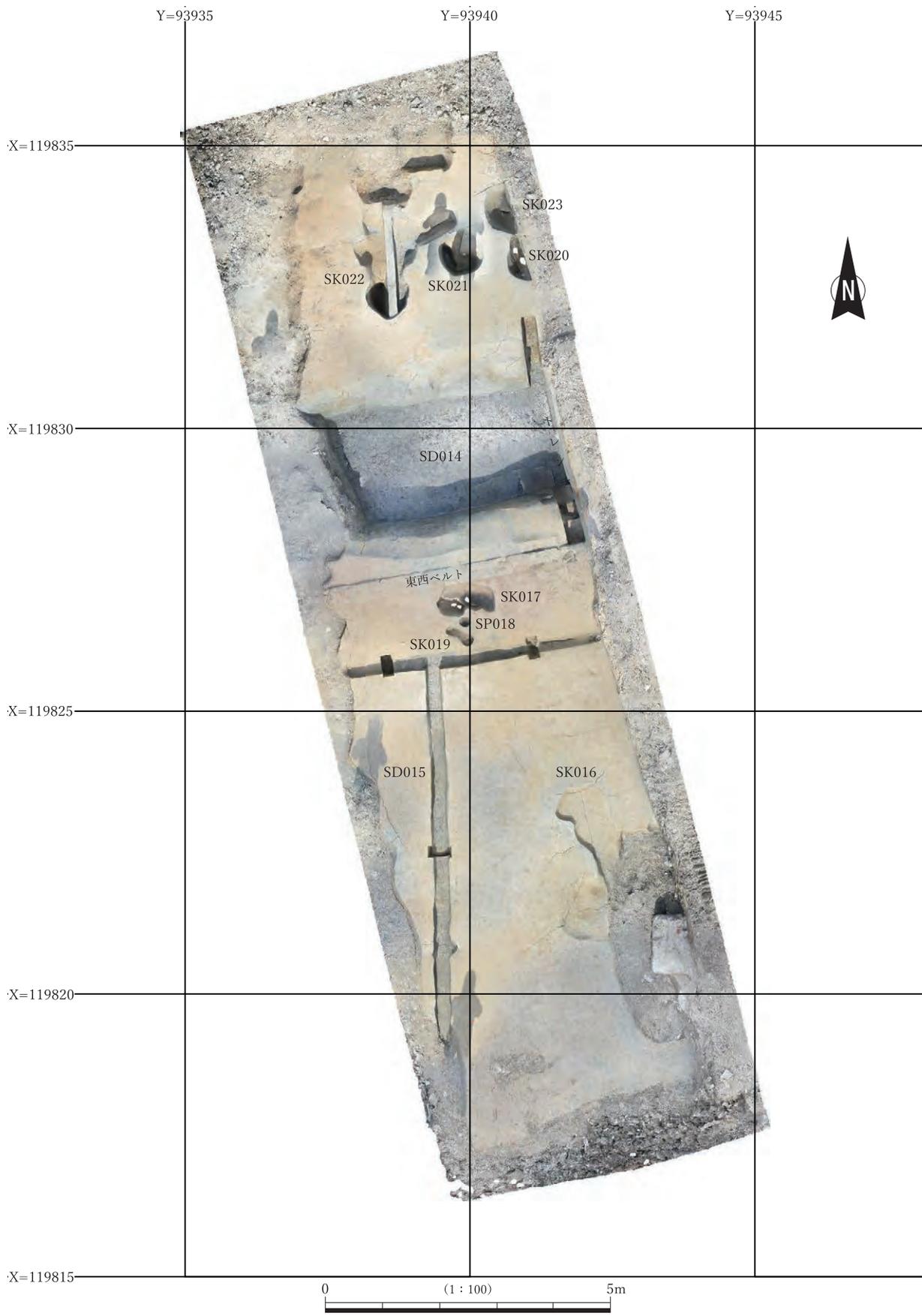


図 27 第 33 次調査 II 区第 1 遺構面オルソ写真

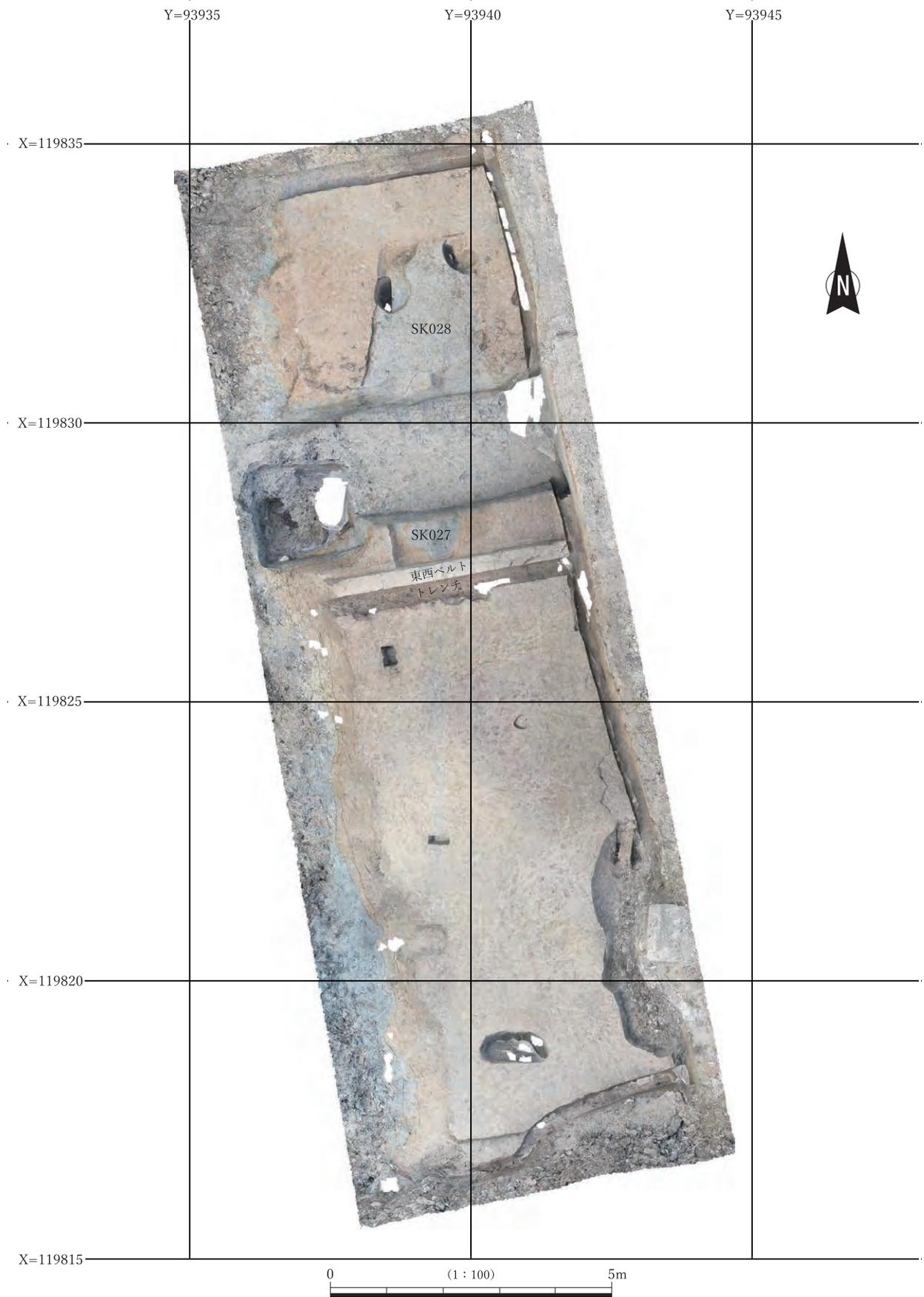


図 28 第 33 次調査 II 区第 2 遺構面オルソ写真

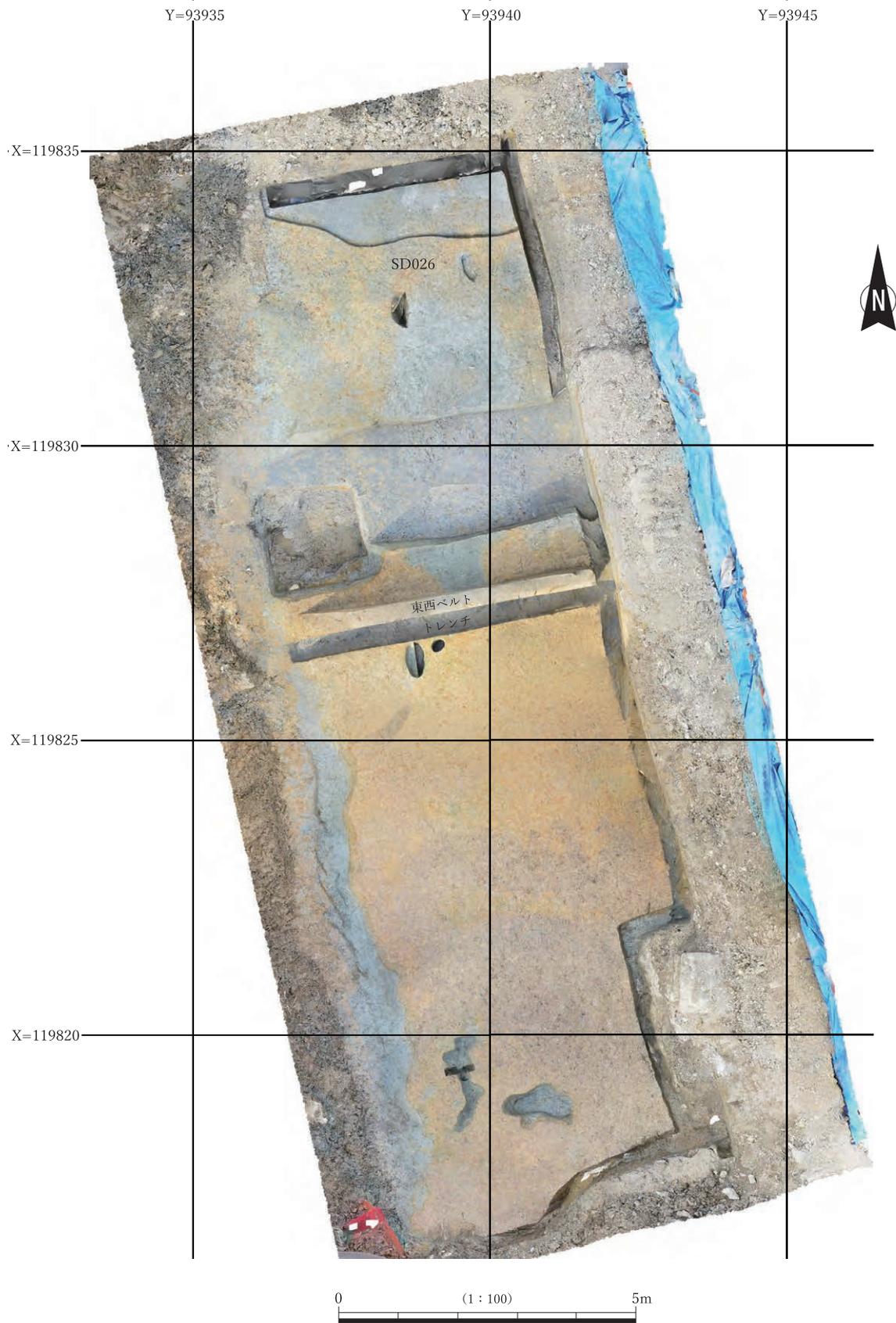


図 29 第 33 次調査 II 区第 3 遺構面オルソ写真

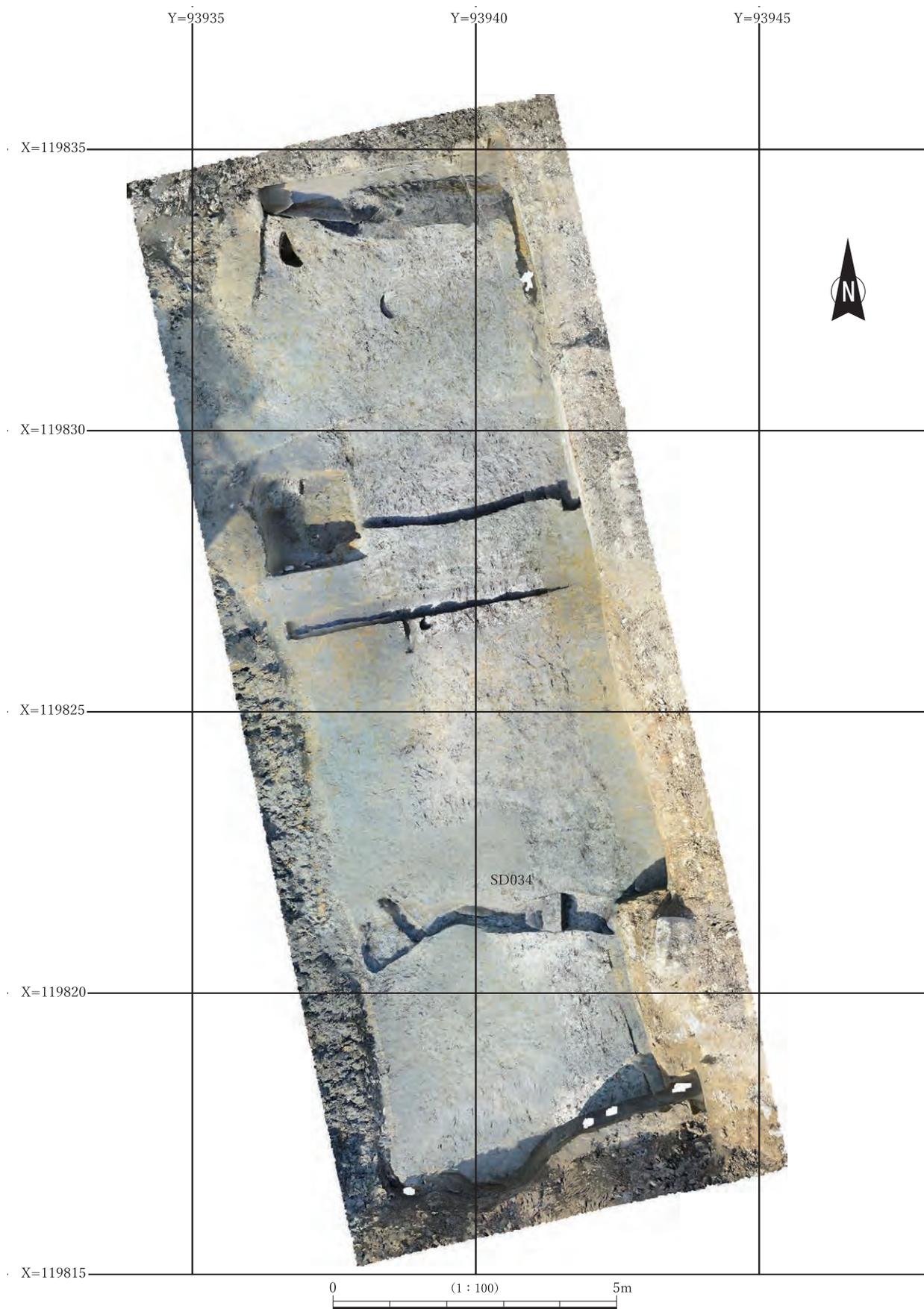


図 30 第 33 次調査 II 区第 4 遺構面オルソ写真



図 31 第 33 次調査Ⅲ・Ⅳ区オルソ写真



図 32 第 33 次調査 SD026 出土知多窯山茶碗



図 33 第 33 次調査 SK028 人骨出土状況

## (2) 遺構の概要

本調査地点では、弥生時代前期の土坑・ピット・溝、中世の溝、近世の土坑・ピット・溝が確認された。以下、調査区ごとに述べる。

### 〔I区〕(図 21・26)

土坑 5 基 (SK001・SK002・SK010・SK011・SK012)、ピット 2 基 (SP008・SP009)、溝 6 条 (SD003・SD004・SD005・SD006・SD007・SD013) が検出された。遺構の多くは検出層位からみて、弥生時代前期中葉に属するものと考えられる。

### 〔II区〕(図 22～25・27～30)

第 1 遺構面では、近世の土坑 7 基 (SK016・SK017・SK019・SK020・SK021・SK022・SK023)、ピット 1 基 (SP018)、溝 2 条 (SD014・SD015) が検出された。SD014 は用水路、SD015 は石組暗渠である。第 2 遺構面では、近世の土坑 2 基 (SK027・SK028) が検出された。SK028 の底面からは、人骨の一部が出土した。第 3 遺構面の北端部からは、中世の溝 (SD026) が検出された。この溝は III 区北端部、IV 区南端部でも検出された。第 4 遺構面の南側では、弥生時代前期中葉の溝 1 条 (SD034) が検出された。〔III・IV区〕(図 21・31)

溝 3 条 (SD024・SD026・SD035) が検出された。SD024 は弥生時代前期中葉、SD026 は中世に属する。SD035 の時期は不明である。

## (3) 遺物の概要

本調査地点で出土した遺物は、1000 m<sup>2</sup>を超える面積のわりにはごく少量にとどまり、コンテナで 4 箱分である。弥生土器・土師器・陶磁器・瓦・石製品・木製品・金属製品・人骨などの遺物が出土した。SD026 から出土した知多窯山茶碗 (図 32) は、12 世紀第 1 四半期に位置づけられており (中野 1995)、この遺構の年代を推定するための貴重な手がかりとなる。近世の SK028 から出土した人骨の部位は、下顎骨・鎖骨・歯牙などである (図 33)。SK028 は自然堆積層からなる埋土の状況からみて、墓ではない。出土した人骨は、周辺に存在した墓が何らかの理由によって壊され、その遺体の一部が流れ込んだものとみられる。

## C まとめ

本調査地点では、弥生時代前期・中世・近世といった様々な時期の遺構・遺物が確認された。なかでも注目されるのは、弥生時代前期中葉の溝 SD024・SD034、中世の水路 SD026、近世の水路 SD014 である。弥生時代前期中葉の SD024・SD034 は、西側の第 26 次調査 (大塚講堂) 地点 (三阪編 2016) の用水路につながり、東側の第 28 次調査 (外来診療棟) 地点 (三阪編 2016) の水田などへの給水路として機能した可能性がある。中世の SD026 は、西側の第 25 次調査 (附属図書館蔵本分館増築 II 期) 地点、第 26 次調査 (大塚講堂) 地点 (三阪編 2016) で検出された、東西方位をとる「旧河道」につながるものと考えられる。この溝の主軸方位は W10° S であり、これは多くの先学 (一山 2002, 木原 2002 ほか) が想定する、古代の条里制地割の東西軸方位と一致する。したがって、これらの遺構は、古代の条里制地割の方位規制を引き継いでつくられた、人工の水路の可能性が高い。近世の SD014 は、西側の第 12 次調査 (附属図書館蔵本分館増築) 地点 (徳大埋文委・徳大埋文調 1994) で検出された、東西方位をとる近世の溝につながるものと考えられる。第 12 次調査地点の近世の溝は、絵図などと照合した結果、江戸時代の「蔵本村」における基本地割の区画線にあたるということが判明している。このほかにも、本遺跡

の多くの調査地点で、条里制地割に沿う溝が検出されている。第17次調査（中央診療棟）地点（徳大施設・徳大埋文2000）では、中世の条里制地割溝におおむね沿ったかたちで、近世の溝がつけられたことが確認されている。本調査地点でも同様に、中世の溝からやや南側に位置をずらしつつも、それに並行する近世の溝を確認できた。このように、弥生時代前期中葉・中世・近世における農地経営、景観の復元に寄与する、有益な情報が得られた点に、本調査の意義をおきたい。

## V 第34次調査（寄宿舍棟地点）

### A 調査に至る経緯・経過

#### (1) 調査に至る経緯

2019年度、蔵本キャンパス南東部に位置する、看護師宿舎棟を取り壊し、新たに寄宿舍棟を建設することが計画された（図2）。それまでに、建設予定地の北側の第13次調査地点では弥生時代前期の竪穴住居跡・用水路、弥生時代中期後葉の方形周溝墓、弥生時代後期の甕棺墓・竪穴住居跡、古墳時代中期の溝（徳大埋文委・徳大埋文調1997a）、北西側の第20次調査地点では弥生時代前期中葉の用水路・旧河道・畑跡、弥生時代中期後葉の方形周溝墓（中村2009b）、北西側から西側にかけての第15次調査地点では弥生時代前期前葉～中葉の2条の大溝（徳大埋文委・徳大埋文調1997b）が検出されていた。そのため、これらに関係する遺構・遺物が、予定地の範囲まで広がっている可能性を想定し得た。そこで、建設工事に先立って、調査員1名による発掘調査を実施した（図34）。調査面積は1212㎡、調査期間は2019年7月1日～10月7日である。

#### (2) 調査の体制

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）

調査員 端野晋平

調査補助員 久米淑子、中原尚子、板東美幸（施設マネジメント部・技術補佐員）

#### (3) 調査の経過

7月1日、調査区の東部を「東区」、西部を「西区」というように区割りを行い、東区の重機掘削を開始した。重機掘削は、既設建物範囲（以下、既設地区と呼ぶ）については黒色粘土層上面、既設地区から外れた北側の新規建物範囲（以下、新規地区と呼ぶ）については黒褐色土層上面までとした。8日より、作業員を動員し、人力掘削を開始した。調査は既設地区の東側から行ったが、ここでは遺構は検出されなかった。29日より新規地区、30日より既設地区西側の調査を開始した。8月5日までに新規地区では、第0遺構面（黒褐色土層中位）、第1遺構面（黄褐色細砂層上面）の全体写真の撮影を終え、第2遺構面（暗褐色粘質土層上面）への掘り下げを開始した。9日、第2遺構面の全体写真撮影を終え、東区での全ての調査を完了した。既設地区西側では、東側と同様、遺構は検出されなかった。19日より、東区の重機による埋め戻しを開始した。21日より、東区の埋め戻しと並行して、西区の重機掘削を開始した。26日、作業員による人力掘削を開始した。調査は新規地区と既設地区とに分け、新規地区の第0遺構面（黒褐色土層中位）までの掘り下げから実施した。結局、第0遺構面では遺構を検出し得ず、9月4日から、第1遺構面（黄褐色細砂層上面）への掘り下げを実施した。9月11日、新規地区東側の第1遺構面の全体写真の撮影を完了し、第2遺構面（暗褐色粘質土層上面）への掘り下げを開始した。9月17日、新規地区西側第1遺構面の全体写真の撮影を終え、第2遺構面への掘り下げを開



図 34 第 34 次調査作業風景

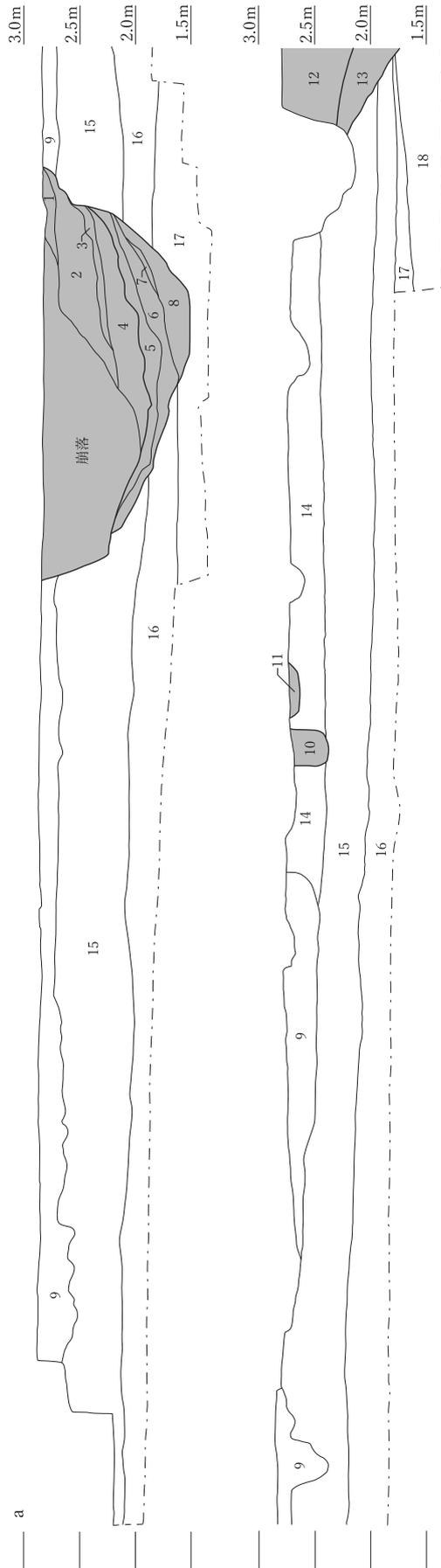
始した。9月19日、新規地区東側第2遺構面の全体写真の撮影を終えた。9月24日、新規地区西側第2遺構面の全体写真の撮影を終えた。9月25日から、既設地区の掘り下げと精査を実施したが、そこでは遺構を検出し得なかった。9月27日、西区の全体写真を撮影した。10月7日、現場の後片付けと出土遺物の搬出を行い、全ての作業を完了した。

## B 調査成果

### (1) 基本層序

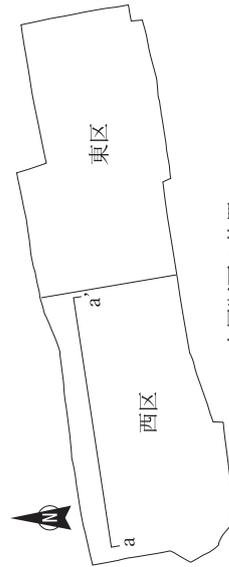
西区東西ベルト南壁の土層断面(図35・36)にもとづいて、本調査地点の基本土層を詳述することとする。基本土層は以下の6層に分けられる。

- 9層 灰黄褐色(10YR5/2) 極細砂からなる。上面の標高は2.70～2.90m、厚さは5～45cmを測る。
- 14層 にぶい黄色(2.5Y6/4) 極細砂からなる。上面の標高は2.70～2.80m、厚さは5～35cmを測る。
- 15層 明黄褐色(10YR6/6) 極細砂からなる。上面の標高は2.40～2.80m、厚さは15～70cmを測る。
- 16層 黄褐色(2.5Y5/3) シルトからなる。上面の標高は2.00～2.20m、厚さは15～40cmを測る。
- 17層 オリーブ黄色(5Y6/3) 極細砂からなる。上面の標高は1.80～2.00m、厚さは最小で10cm、最大で50cm以上を測る。
- 18層 オリーブ灰色(10Y6/2) 粘土からなる。上面の標高は1.70～1.80mを測る。



- 1 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細砂 鉄分・マンガン◎
- 2 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂 マンガン・鉄分・土器片◎ 炭化物○
- 3 浅黄色 (2.5Y7/3) 極細砂 鉄分・マンガン◎ 炭化物△
- 4 黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂 マンガン◎ 土器片○ 炭化物△
- 5 青灰色 (10BG6/1) シルト 鉄分◎ マンガン○
- 6 緑灰色 (10G6/1) 極細砂 鉄分◎ マンガン・土器片・木片○
- 7 オリーブ灰色 (2.5GY6/1) シルト 鉄分◎ 炭化物○
- 8 灰色 (N5/1) 粘土 鉄分・マンガン・炭化物・土器片◎
- 9 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細砂 マンガン・土器片◎ 炭化物○
- 10 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細砂 マンガン・土器片◎ 炭化物○
- 11 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細砂 マンガン・土器片◎ 炭化物○
- 12 黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂 鉄分・マンガン◎
- 13 緑灰色 (10G5/1) シルト 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 中砂◎(上部<下部)
- 14 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細砂  
鉄分・マンガン・φ 3~5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) シルトブロック◎  
鉄分・マンガン・φ 3~5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) シルトブロック◎
- 15 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂  
鉄分・マンガン・φ 3~5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) シルトブロック◎  
鉄分・マンガン・φ 3~5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) シルトブロック◎
- 16 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト  
鉄分・マンガン・φ 3~5 cm 灰黄褐色 (10YR5/2) シルトブロック◎
- 17 オリーブ黄色 (5Y6/3) 極細砂 鉄分・マンガン◎
- 18 オリーブ灰色 (10Y6/2) 粘土 鉄分○  
<混入物の量> ◎多量 ○中量 △少量

- a' 3.0m 2.5m 2.0m 1.5m
- 9・14~18 基本土層
  - 1~4 SD12埋土
  - 5~8 SD29埋土
  - 10・11 遺構埋土
  - 12 SD13埋土
  - 13 SD27埋土
- \*12・13は崩落により分層記録なし



土層断面の位置

図 35 第 34 次調査西区土層断面



図 36 第34次調査西区土層断面写真

周辺地点で得られた層位学的所見（中村 2000 ほか）からみて、9層は弥生時代前期末～中世の土壌化層（黒褐色土層）、14・15層は弥生時代前期中葉～前期末の洪水起源砂層（黄褐色細砂層）、16層は弥生時代前期前葉～中葉の遺構が掘り込まれる暗褐色粘質土と判断される。西区では、14・15層上面（標高 2.50～2.70 m）と 16層上面（標高 2.10～2.20 m）の二面で遺構を検出し得た。以下、西区 14・15層上面および東区でそれに対応する層の上面を第 1 遺構面、西区 16層上面を第 2 遺構面として、報告する。また、東区では第 1 遺構面より上位にある弥生時代前期末～中世の土壌化層に対応する層の中からも遺構がいくつか検出された。これらの遺構が検出された面を第 0 遺構面と呼ぶこととする。

## (2) 遺構の概要

本調査地点では、新規地区において弥生時代の溝 7 条、土器溜まり 5 基、土坑 8 基、ピット 7 基、近世の土坑 3 基が確認された。以下、調査区ごとに概要を述べる。

〔東区〕（図 37～39）

第 0 遺構面では、土坑 3 基（SK1・SK2・SK3）が検出された。所属時期は近世と思われる。第 1 遺構面では、弥生時代前期末以降の土器溜まり 3 基（SX4・SX5・SX9）、土坑 2 基（SK7・SK8）、ピット 1 基（SP6）が検出された。

〔西区〕（図 40～45）

第 1 遺構面では、溝 5 条（SD12・SD13・SD14・SD16・SD22）、土器溜まり 2 基（SX17・SX30）、土坑 6 基（SK10・SK11・SK15・SK19・SK21・SK28）、ピット 3 基（SP18・SP20・SP23）が検出された。遺構の多くは弥生時代前期末～中期初頭に属するものと考えられる。北西－南東に走る SD12 と SD13 は、第 2 遺構面の SD29 と SD27 にそれぞれ対応し、これら 2 条の溝が埋没後に形成された窪みと理解されるものである。埋土からは弥生土器などの遺物が多量に出土した。第 2 遺構面では、溝 2 条（SD27・SD29）、ピット 3 基（SP24・SP25・SP26）が検出された。これらの遺構は弥生時代前期前葉～中葉に属するものと判断される。SD27 と SD29 は、第 15 次調査で確認された弥生時代前期前葉～中葉の大溝の続きである。

## (3) 遺物の概要

本調査地点で出土した遺物はコンテナ 25 箱分で、弥生土器・石器・木器などが出土した。とくに弥生前期土器の量が多く、この時期、この地点における人間集団の積極的な活動がうかがえる。

## C 本調査の意義

本調査地点では、弥生時代から近世までの遺構と遺物が確認された。とくに注目されるのは、西区第 2 遺構面で確認された 2 条の溝（SD27・SD29）である。これらは、調査開始前から検出が予想されていた遺構であり、弥生時代前期前葉～中葉の居住域を取り囲む大溝の一部と考えられる（図 46）。従来、これらの大溝は「環濠」とみなされてきたが（中村 1998, 橋本 2001 ほか）、南から眉山北麓の尾根筋が延びてくる地形<sup>註</sup>を考慮すると、環状にはなり得ず、居住域の北側を弓状に囲む溝と理解した方がよいかもしれない。本調査地点の 2 条の大溝の底面高がいずれも、西側から北側にかけての調査地点で確認されたそれに比べて高いことは、この考えを首肯する（図 47）。

大溝は弥生時代前期末になると、窪みというかたちで残り（SD12・SD13）、そこに土器などの遺物が投棄されたようである。居住域に接する SD12 では、それより外に位置する SD13 よりも出土遺物の量が多い。遺物量の多寡は、居住域に近いかどうかに関係しているのかもしれない。また、これらの遺

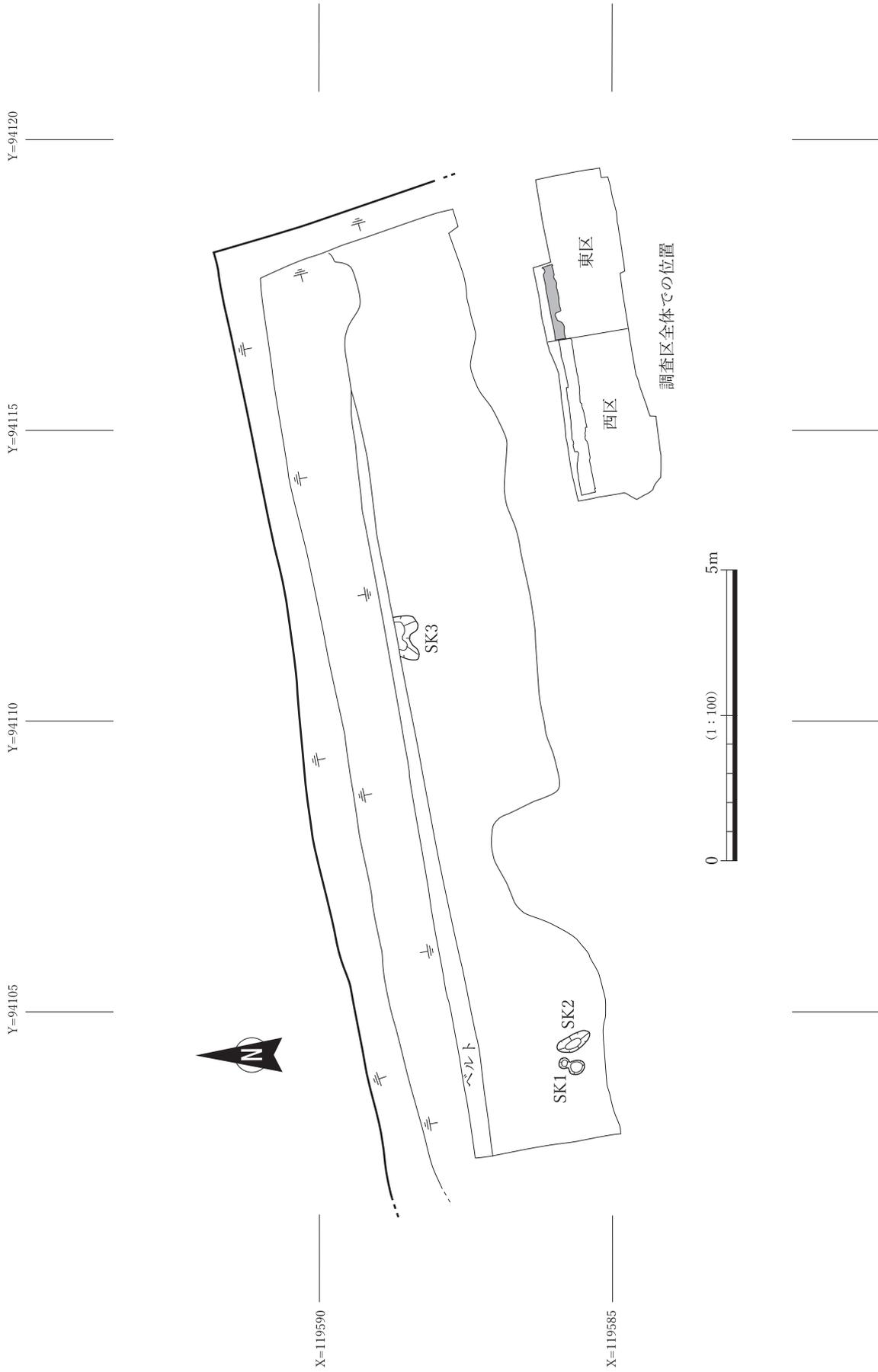


図 37 第 34 次調査東区第 0 遺構面検出遺構

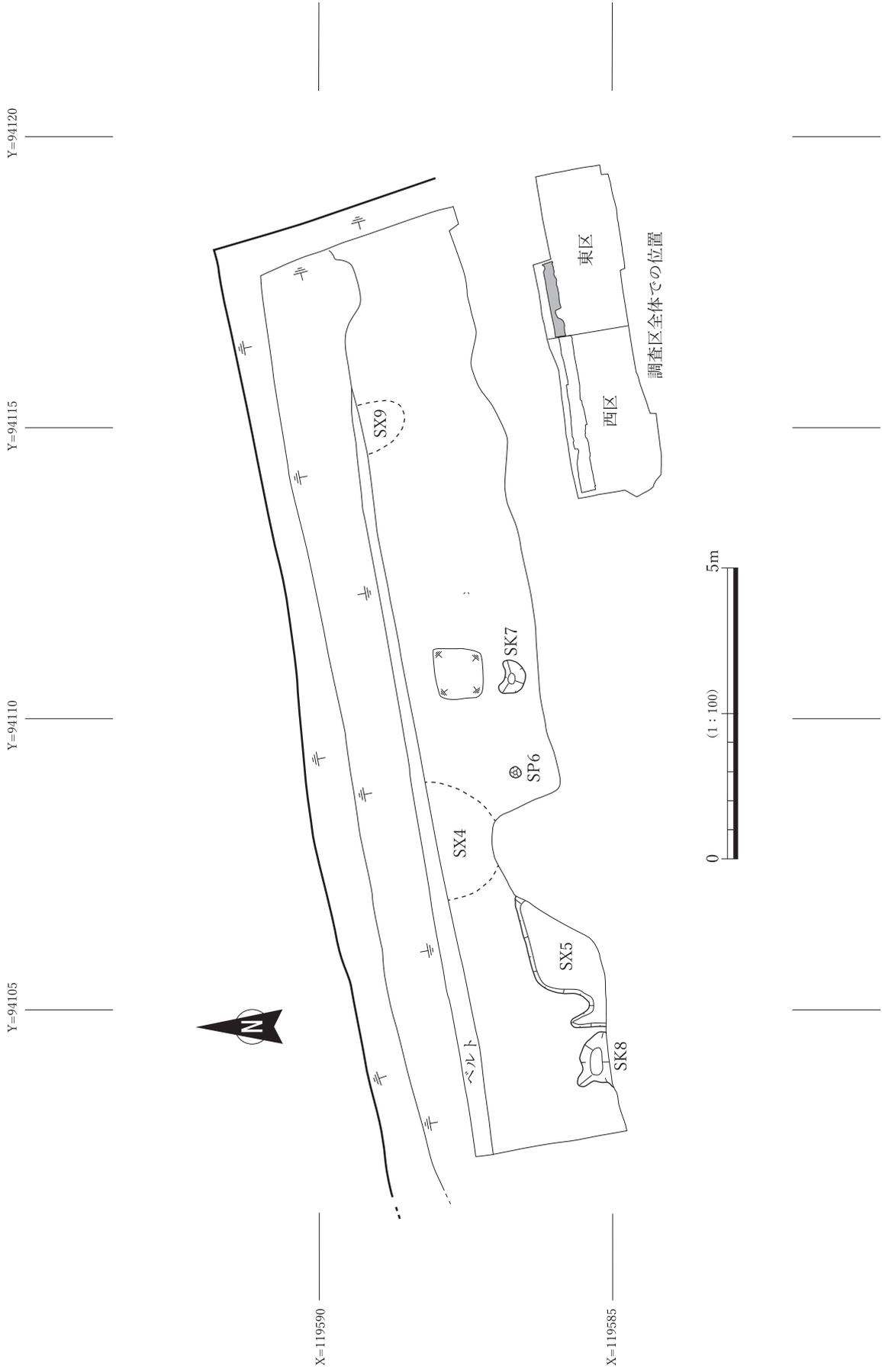


図 38 第 34 次調査東区第 1 遺構面検出遺構



SK8 検出状況（北西から）



SX9 検出状況（南東から）

図 39 第 34 次調査東区第 1 遺構面検出遺構写真

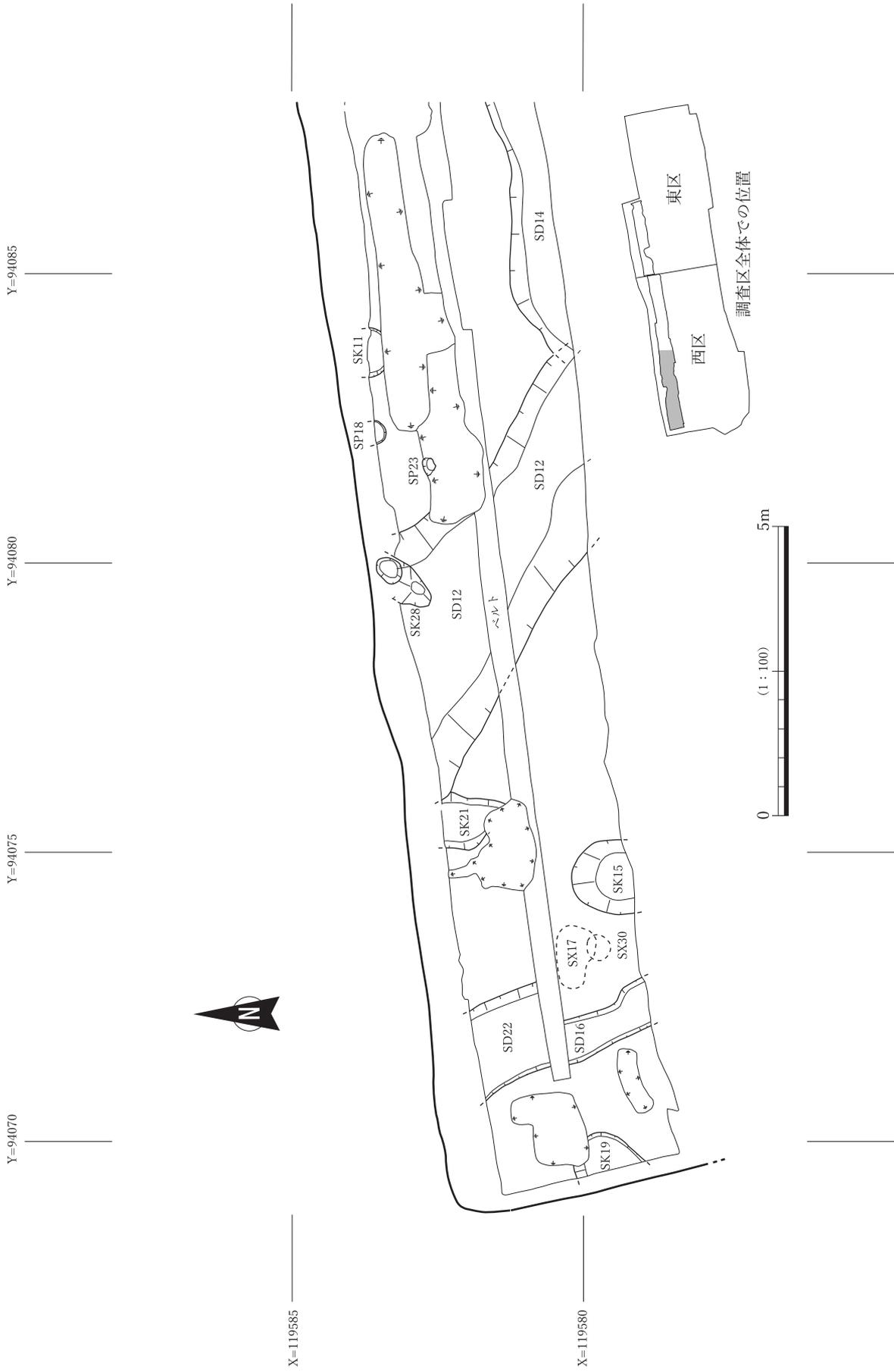


図 40 第 34 次調査西区西半第 1 遺構面検出遺構

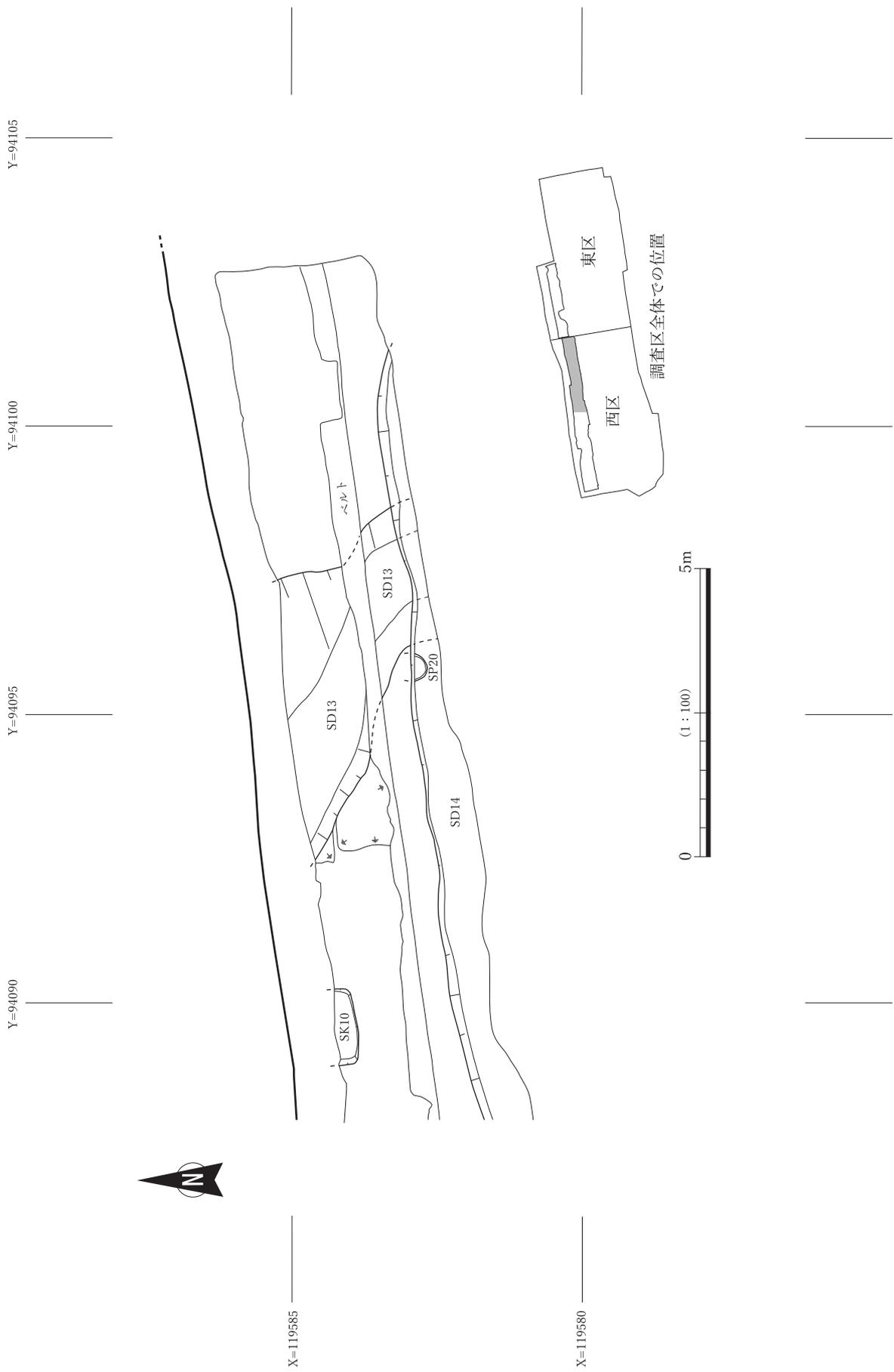


図41 第34次調査西区東半第1遺構面検出遺構

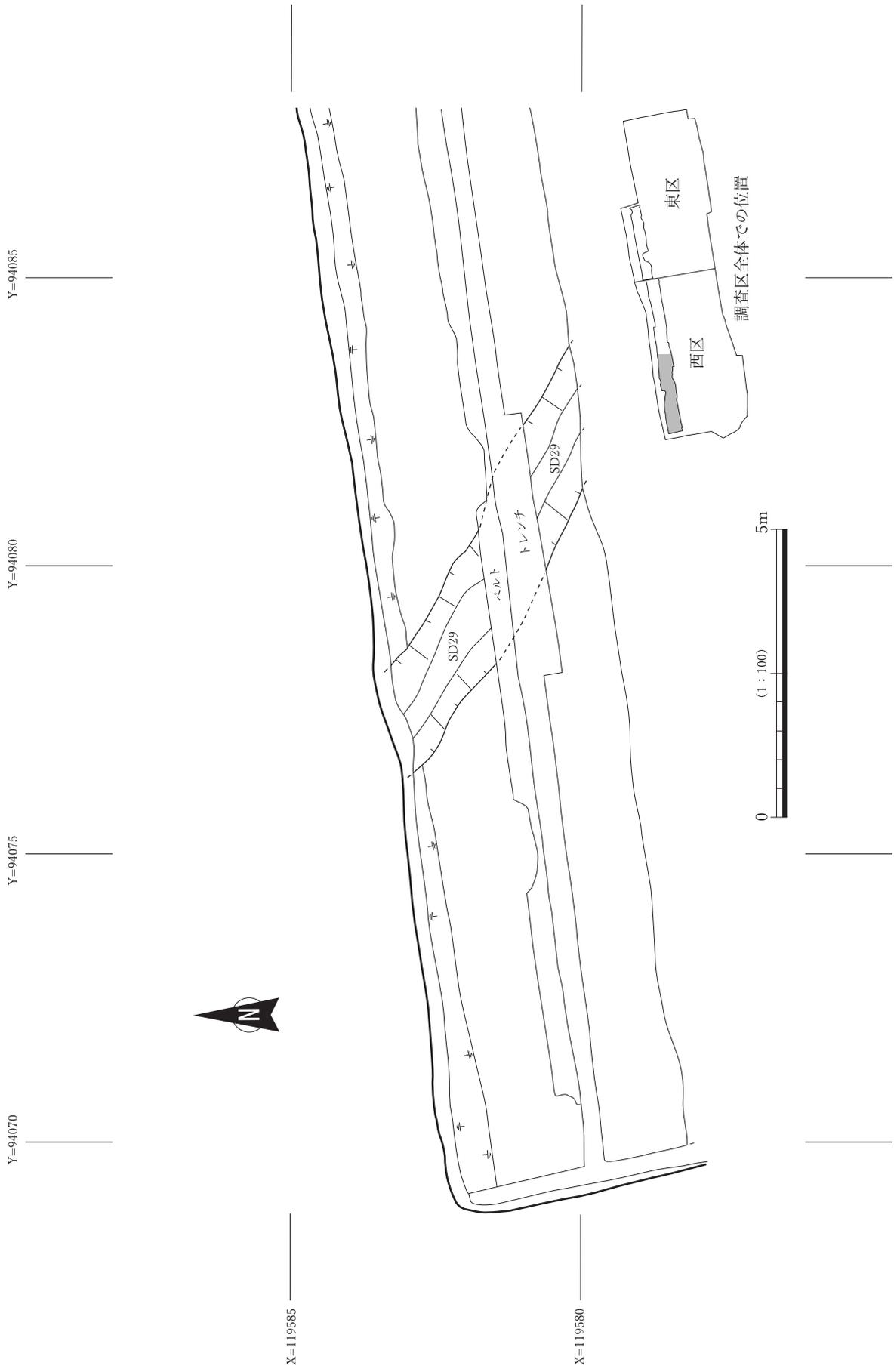


図 42 第 34 次調査西区西半第 2 遺構面検出遺構

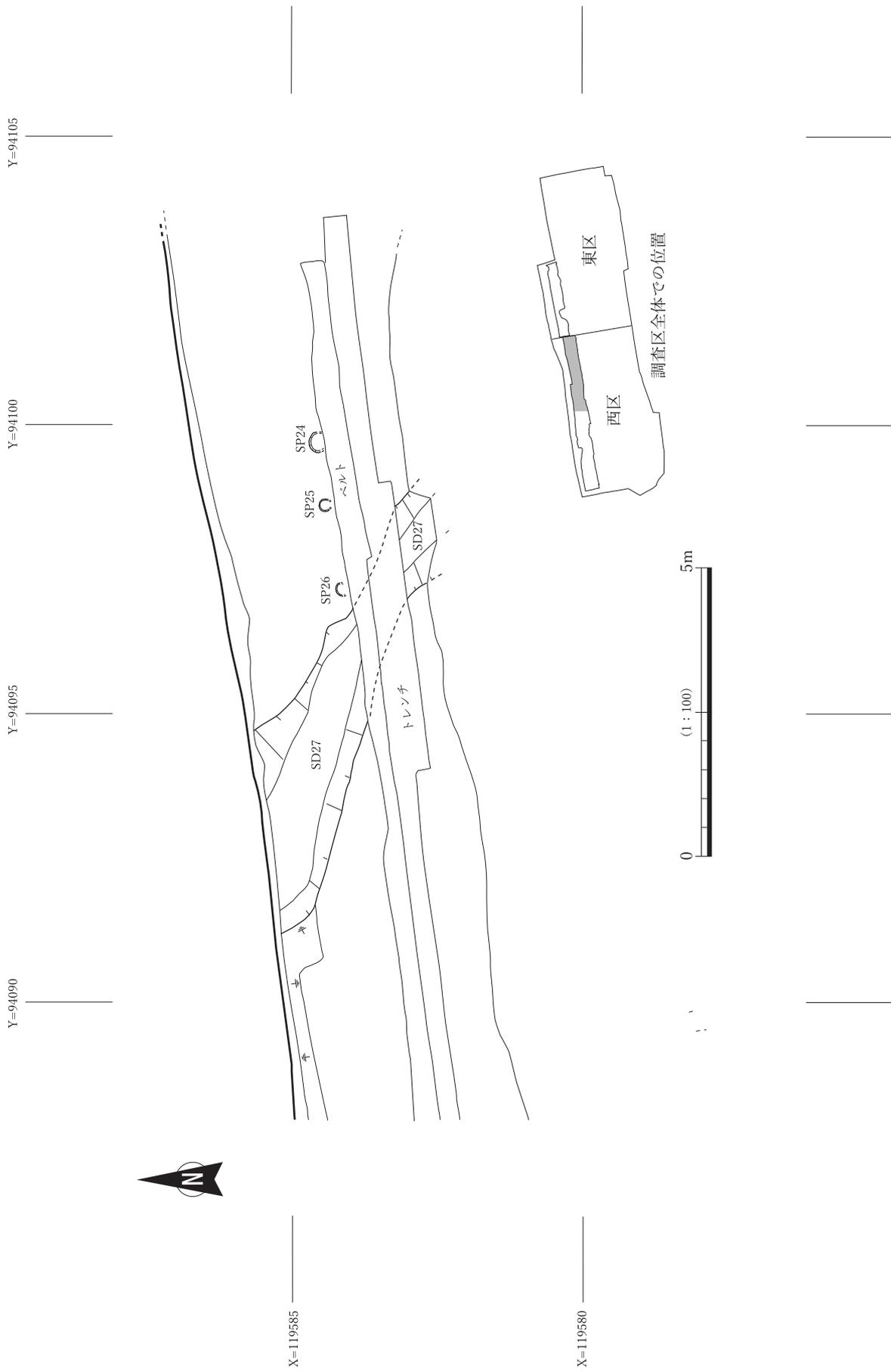


図43 第34次調査西区東半第2遺構面検出遺構



SD12 遺物検出状況（北西から）



SD13 完掘状況（西から）

図 44 第 34 次調査西区第 1 遺構面検出遺構写真



SD29 完掘状況（北西から）



SD27 完掘状況（西から）

図 45 第 34 次調査西区第 2 遺構面検出遺構写真

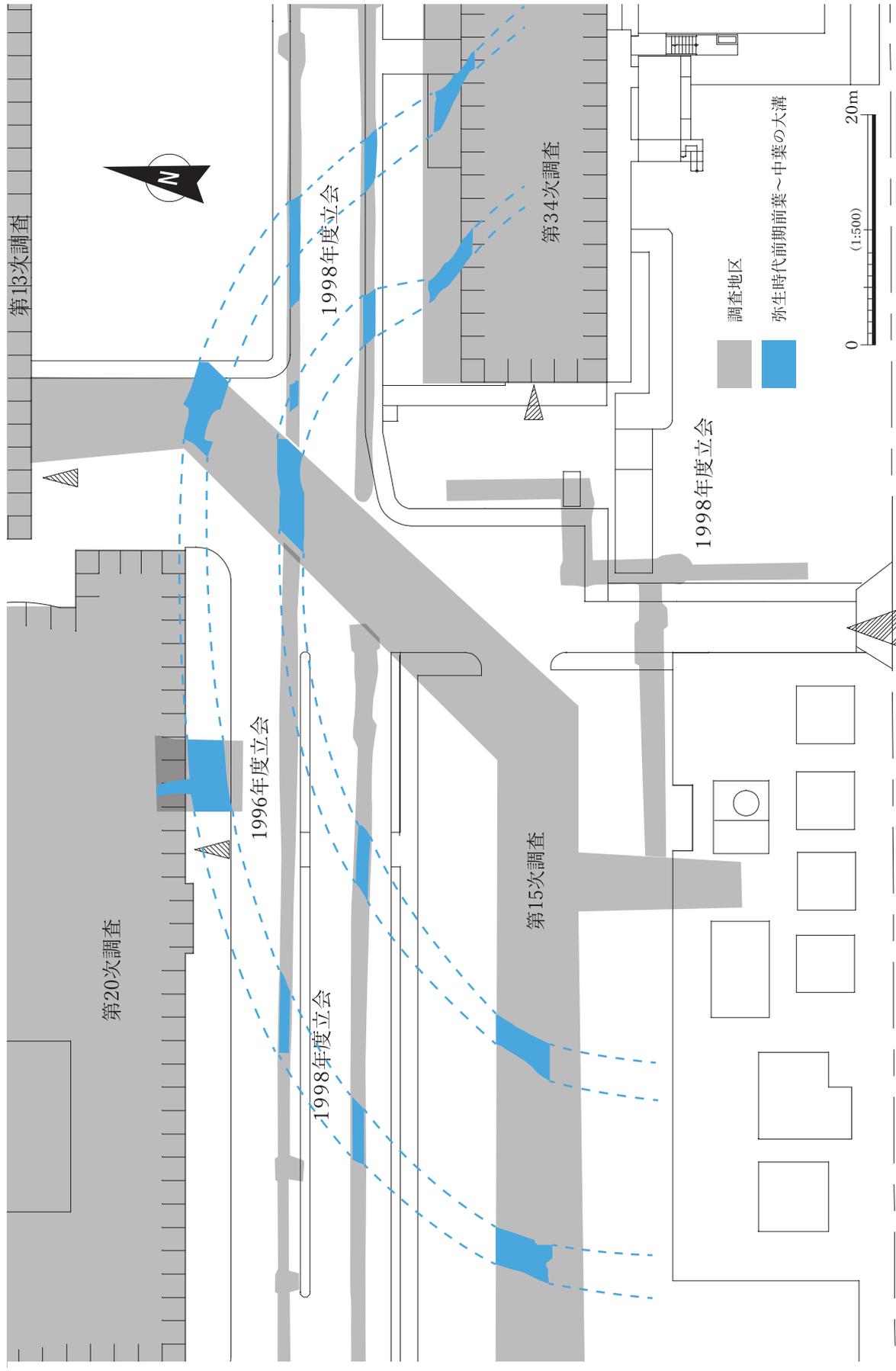


図 46 各調査地点で検出された大溝

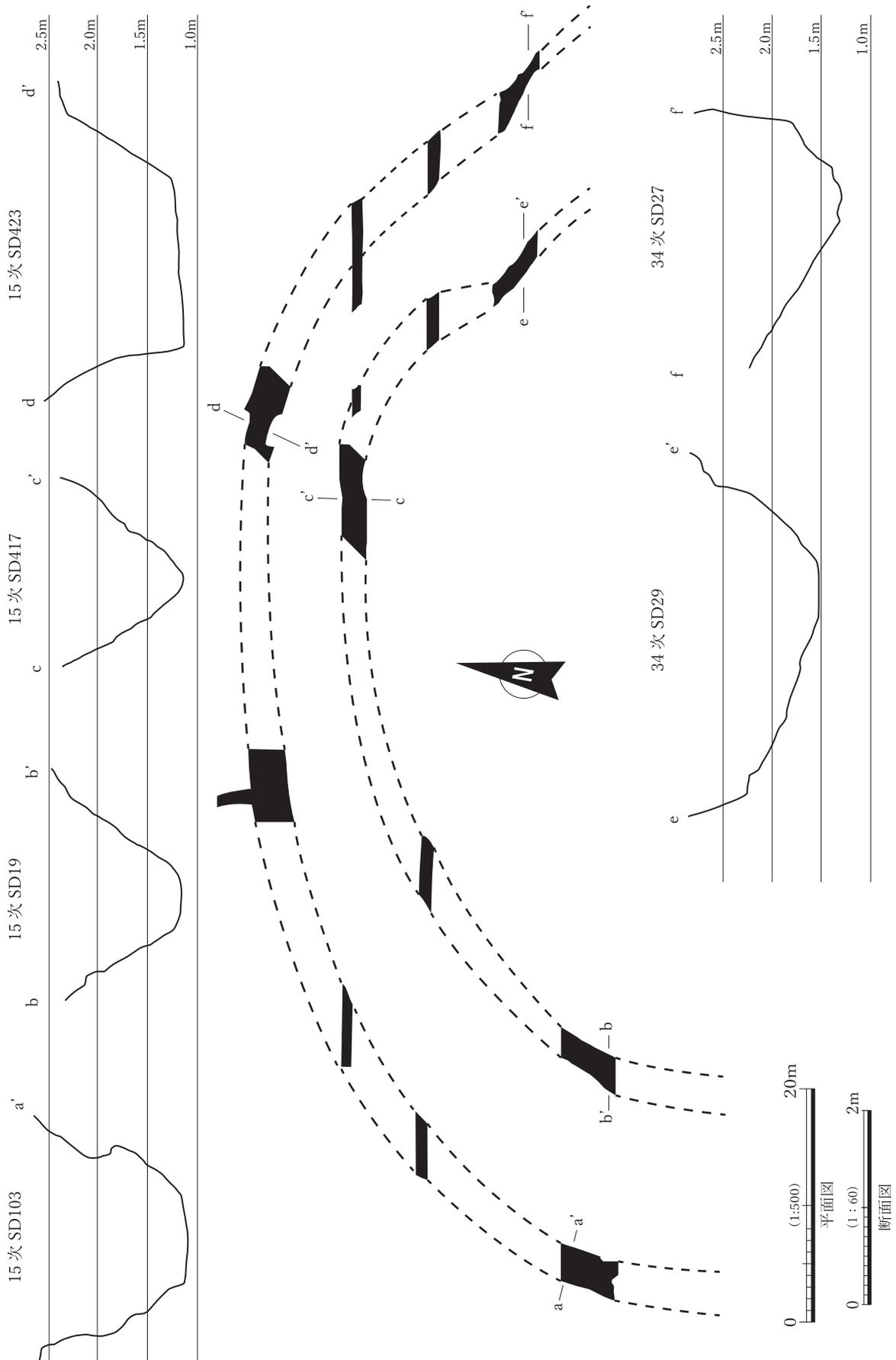


図47 各調査地点における大溝の深さ

構からの出土遺物をはじめ、弥生時代前期の遺物が多数確認されたことも特筆すべき成果である。このように、弥生時代初期の景観復元、生活誌に寄与する成果が得られた点に、本調査の意義をおきたい。

## VI 第35次調査（多用途型トリアージスペース地点）

### A 調査に至る経緯・経過

#### (1) 調査に至る経緯

2020年度、新型コロナウイルス感染拡大に対する対策事業として急遽、蔵本キャンパスの北東部に多用途型トリアージスペースを建設することが計画された（図2）。それまでに、建設予定地のすぐ西側の第30次調査地点では弥生時代前期中葉の溝状遺構（端野編2018）、北西側の第33次調査地点では弥生時代前期中葉の用水路（本稿IV章）、西側の第19次調査地点では弥生時代前期中葉の水田畦畔と用水路（中村2009a）、東側の第28次調査地点、南側の第24次調査地点では弥生時代前期中葉の水田畦畔（三阪編2016）が検出されていた。そのため、これらに関する遺構・遺物が、予定地の範囲まで広がっている可能性を想定し得た。そこで、建設工事に先立って、調査員1名による発掘調査を実施した。調査面積は275㎡、調査期間は2021年3月2日～4月6日である。

#### (2) 調査の体制

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）

調査員 端野晋平

調査補助員 岸本多美子，久米淑子，中原尚子，板東美幸，前田千夏，山本愛子（施設マネジメント部・技術補佐員）

作業員 8名（本学総合科学部学生3名含む）

### B 調査成果

#### (1) 基本層序

西区北壁の土層断面（図48）にもとづいて、本調査地点の基本土層を詳述することとする。基本土層は以下の12層に分けられる。

- 1層 黄褐色（2.5Y5/3）シルトからなる。上面の標高は2.65m、厚さは10～20cmを測る。
- 2層 黄灰色（2.5Y6/1）シルトからなる。上面の標高は2.55m、厚さは5～10cmを測る。
- 3層 灰オリーブ色（7.5Y6/2）シルトからなる。上面の標高は2.45m、厚さは5～10cmを測る。
- 4層 オリーブ黄色（7.5Y6/3）シルトからなる。上面の標高は2.30m、厚さは約10cmを測る。
- 5層 にぶい黄色（2.5Y6/4）シルトからなる。上面の標高は2.25m、厚さは5～10cmを測る。
- 6層 灰黄色（2.5Y6/2）シルトからなる。上面の標高は2.20m、厚さは5～20cmを測る。
- 7層 明黄褐色（2.5Y6/6）シルトからなる。上面の標高は2.10m、厚さは5～15cmを測る。
- 8層 黄褐色（2.5Y5/4）細砂からなる。上面の標高は2.00m、厚さは10～25cmを測る。
- 9層 にぶい黄色（2.5Y6/4）シルトからなる。上面の標高は1.90m、厚さは5～30cmを測る。
- 10層 灰黄色（2.5Y7/2）シルトからなる。上面の標高は1.75m、厚さは5～15cmを測る。
- 11a層 灰黄褐色（10YR6/2）粘質シルトからなる。上面の標高は1.60m、厚さは5～10cmを測る。
- 11b層 黄褐色（2.5Y5/3）粘土からなる。上面の標高は1.55mを測る。

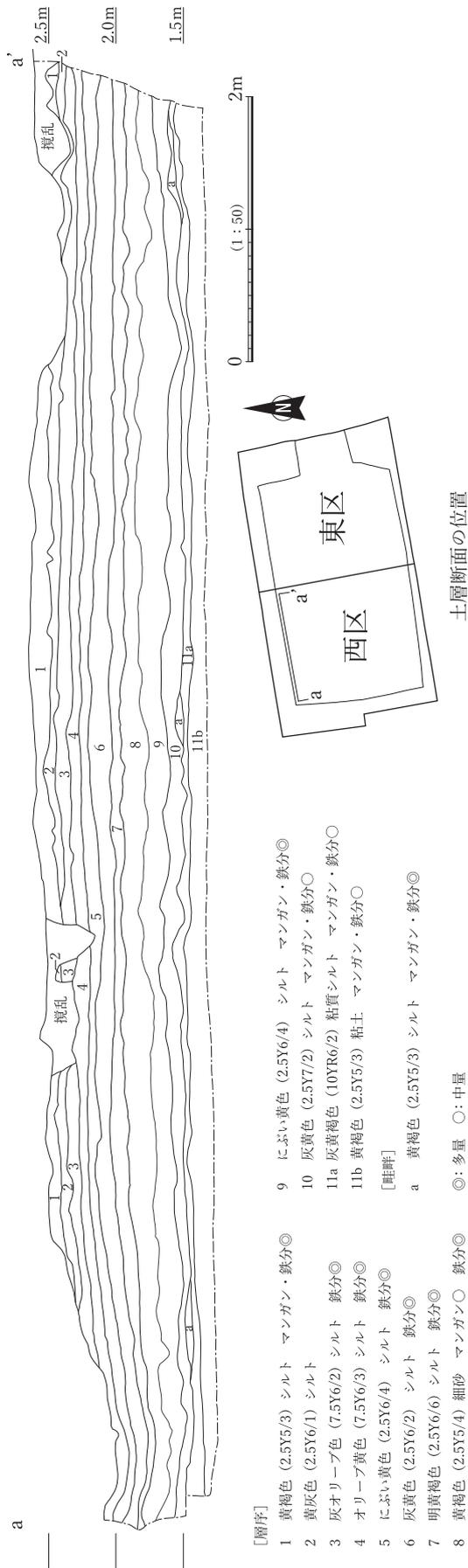


図 48 第 35 次調査西区北壁土層断面

本遺跡でこれまでに得られた層位学的所見（中村 2000 ほか）からみて、1層は近世の土壌化層、2層は近世の水田層、6層は弥生時代前期末～中世の土壌化層（黒褐色土層）、7～10層は弥生時代前期中葉～前期末の洪水起源砂層（黄褐色シルト層）、11a・11b層は弥生時代前期中葉の水田耕作土層と判断される。本調査地点では、7層上面を第1遺構面、11a層上面を第2遺構面として、遺構を検出した。

## (2) 遺構の概要

本調査地点では、調査区の西半部を「西区」、東半部を「東区」と呼び、それぞれの地区ごとに2面の遺構面で遺構を検出した。第1遺構面では、弥生時代前期末以降の溝（SD）4条、土坑（SK）11基、ピット（SP）2基が検出された（図 49）。第2遺構面では、弥生時代前期中葉の水田畦畔、溝3条、ピット2基、不明遺構1基が確認された（図 50）。畦畔は幅約 50 cm、高さ 10 cm以下の小畦畔であり、東西方向・南北方向にそれぞれ4条検出しえた（図 51・52）。10筆以上の水田面の存在が推定され、規模は最小の水田面で、4 m × 2 m程度を測る。水田面の平面形態は東西方向に細長い長方形をなしている。これは、これまで周辺地点で確認された水田と同様、本来の地形に沿ってつくられた結果とみられる。

## (3) 遺物の概要

本調査地点で出土した遺物はコンテナ1箱分で、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器などが出土した。

## C 本調査の意義

本調査地点では、弥生時代前期以降の遺構と遺物が確認された。とくに注目されるのは、第2遺構面で確認された弥生時代前期中葉の水田畦畔である。これは、調査開始前から検出が予想されていた遺構で、弥生時代前期中葉の水田域の一部と考えられる（図 53）。本遺跡での弥生前期中葉の水田の発見は、これで5例目となり、初期弥生集落の景観と弥生人の生産活動の復元に寄与する成果が得られた点に、本調査の意義をおきたい。

## おわりに

以上、庄・蔵本遺跡第 31～35 次調査の成果を概観した。調査成果のうち、とくに注目されるのは、弥生時代前期前葉～中葉の居住域を囲む大溝、弥生時代前期中葉の水田畦畔・用水路、古代～近世の用水路であり、弥生時代初期の農耕集落、および古代～近世の条里の復元に貢献するものといえる。

## 註

近藤玲 (2017) が調査記録と現地踏査により作成した集落図（同論文の図 9）において、大溝に囲まれた居住域は、南側の眉山北麓から延びる谷筋に挟まれており、このような想定が成り立つ。

## 文献

- 東潮・中原計・石村友規・大谷育恵・松浦稔, 2006. 徳島市八人塚古墳測量調査報告. 徳島大学総合科学部人間社会文化研究 13, 61-83.
- 石尾和仁, 2002. 中世阿波における集落の展開. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.647-656.
- 一山典, 2002. 阿波国府の考古学的考察. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会,

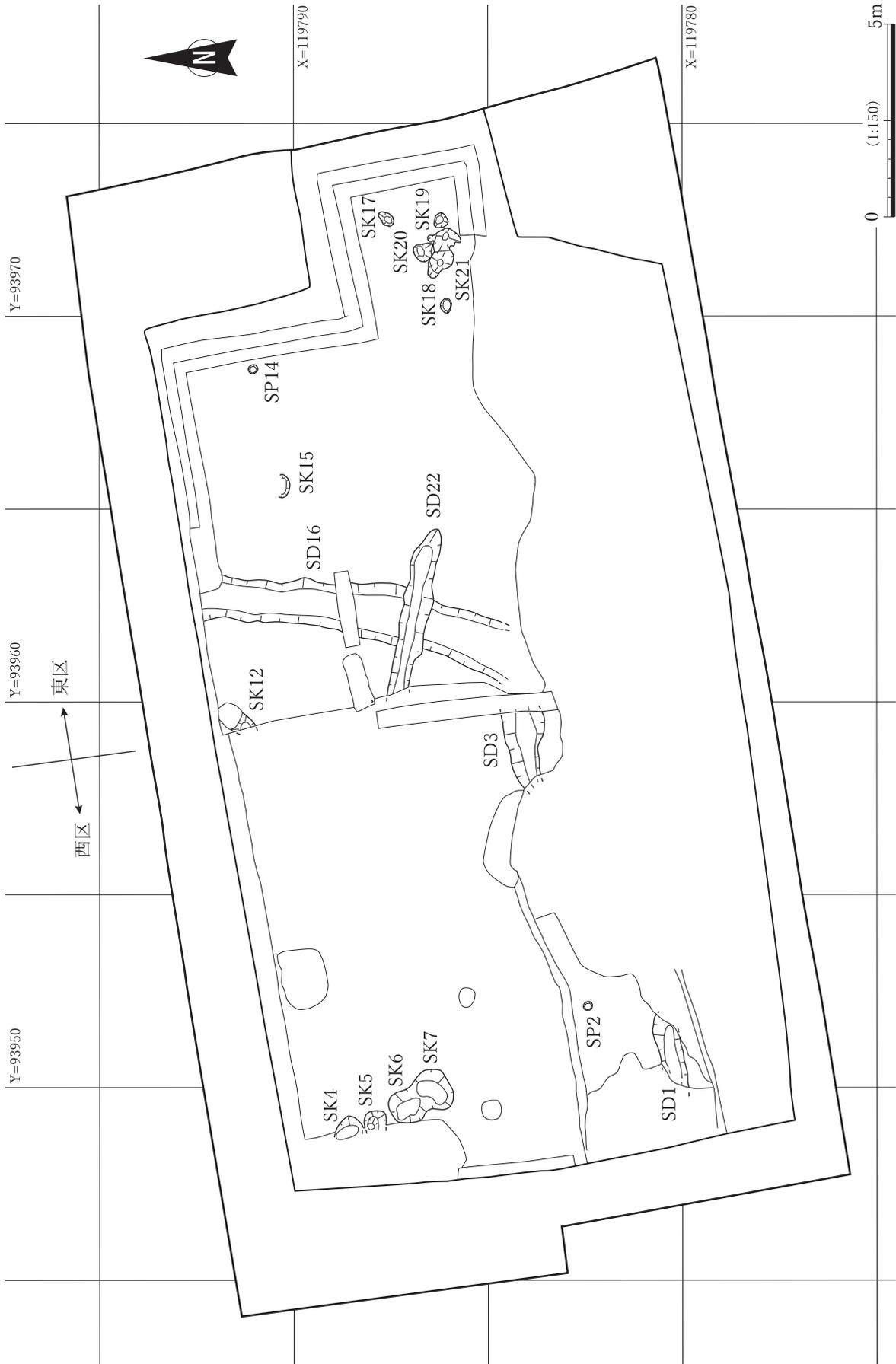


図49 第35次調査第1遺構面全体図



图 50 第 35 次調査第 2 遺構面全体図



図 51 第 35 次調査弥生時代前期水田の写真

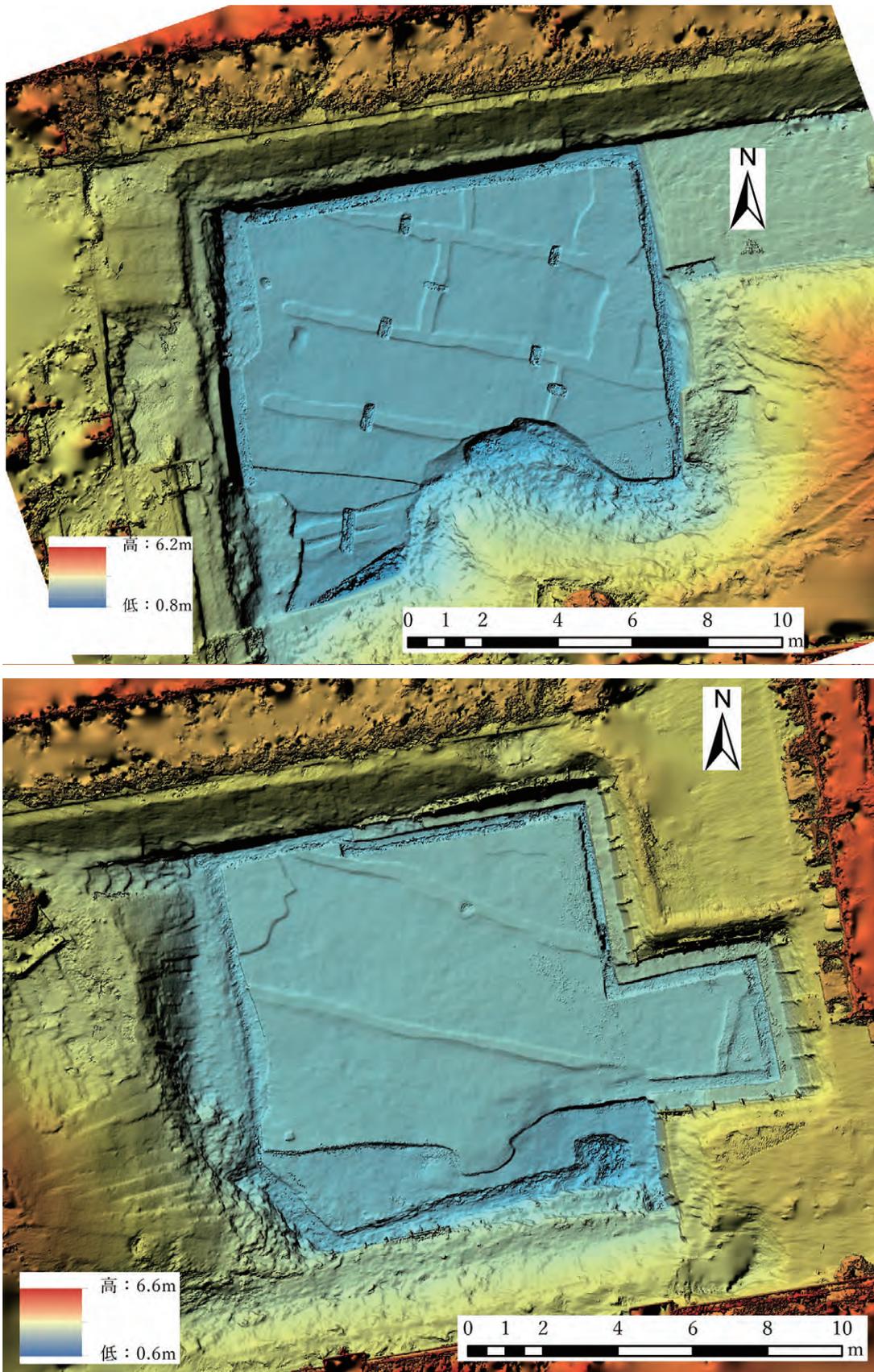


図 52 第 35 次調査弥生時代前期水田の DSM

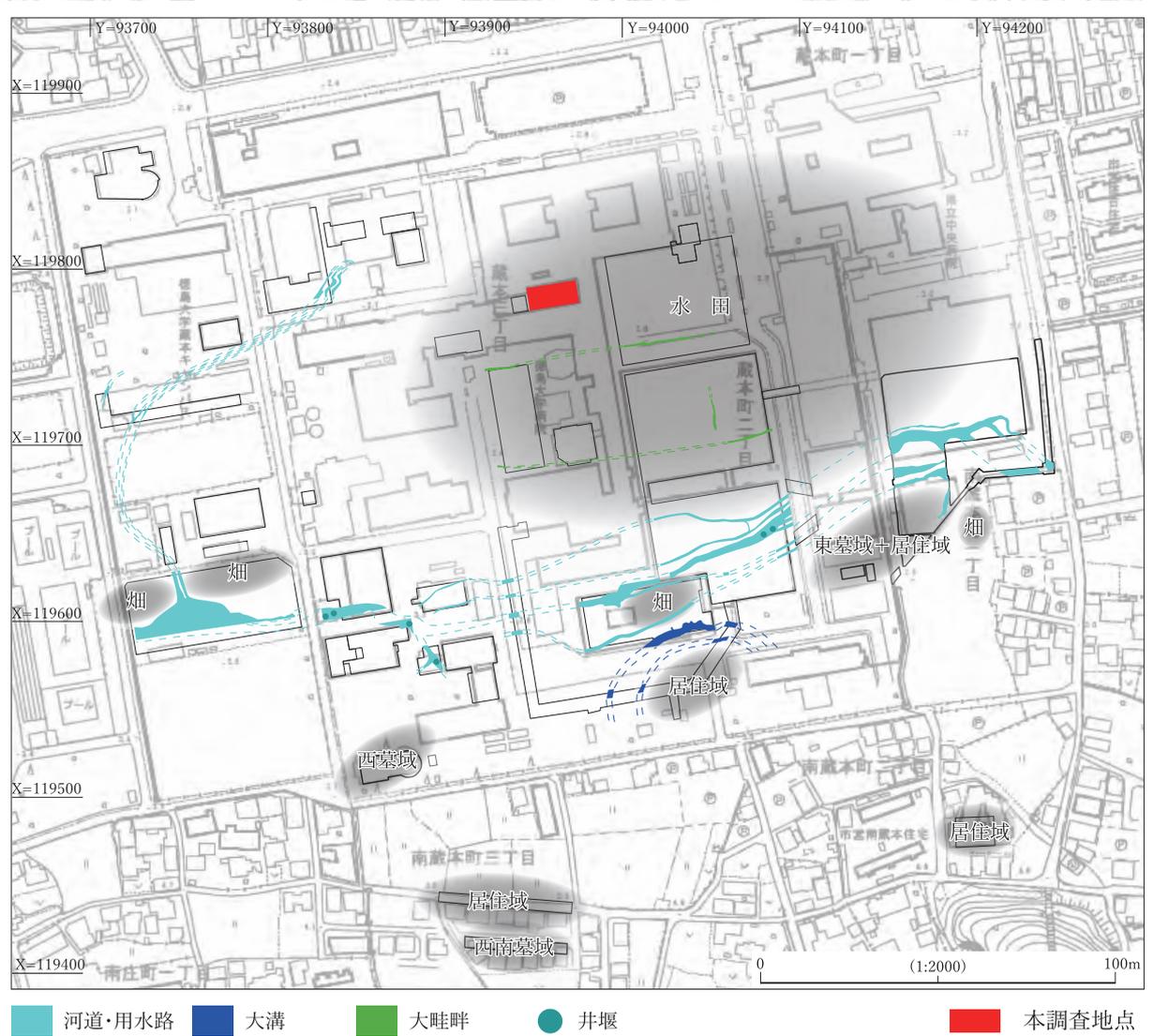


図 53 弥生時代前期前葉～中葉の主要遺構と第 35 次調査地点の位置

徳島, pp.595-610.

氏家敏之, 2002. 先土器時代(旧石器時代). 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.11-28.

岡山真知子編, 1999. 庄遺跡Ⅲ: 大蔵省蔵本団地宿舍新営工事(第3期工事)関連埋蔵文化財発掘調査報告. 財団法人徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.

勝浦康守, 1992. 徳島県における古代末から中世の土器様相について. 中近世土器の基礎研究 8, 93-112

勝浦康守編, 1990. 名東遺跡発掘調査概要: 名東町2丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査. 名東遺跡発掘調査委員会, 徳島.

勝浦康守編, 1997. 三谷遺跡: 徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査. 徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会, 徳島.

河野雄次, 1998. 調査成果のまとめ. 徳島大学埋蔵文化財調査室(編), 庄・蔵本遺跡 1. 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 54-55.

木原克司, 2002. 吉野川下流域の条里制施工期と阿波国府の構造. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学.

- 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.611-627.
- 近藤玲, 2012. 徳島市眉山周辺の弥生集落遺跡の動態. 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 10, 31-48.
- 近藤玲編, 2014. 南蔵本遺跡: 県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書. 公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- 近藤玲, 2017. 四国東部における灌漑水田農耕の受容期の年代について. 総研大文化科学研究 13, 149-193.
- 定森秀夫・中村豊編, 2005. 庄(庄・蔵本)遺跡: 徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書. 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 島田豊彰, 2008. 吉野川流域における中世集落の様相. 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 7, 17-28.
- 徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター編, 2006. 徳島県遺跡地図.
- 徳島県・徳島県埋蔵文化財センター, 2021. 徳島県徳島市南蔵本遺跡現地説明会資料. 徳島県・徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- 徳島県の歴史散歩編集委員会編, 2009. 徳島県の歴史散歩, 歴史散歩 36. 山川出版社, 東京.
- 徳島市教育委員会, 1989. 平成元年度文化財調査報告資料. 徳島市教育委員会, 徳島.
- 徳島大学施設委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 2000. 庄・蔵本遺跡発掘調査概要: 新中央診療棟建設に伴う埋蔵文化財調査. 徳島.
- 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 1994. 徳島大学医学部附属図書館棟新営地(庄・蔵本遺跡)埋蔵文化財発掘調査報告.
- 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 1997a. 徳島市庄・蔵本遺跡 95 年度発掘調査概要報告書: 病棟(1期)建設に伴う埋蔵文化財調査.
- 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 1997b. 共同溝建設予定地(庄・蔵本遺跡)埋蔵文化財発掘調査概要報告書.
- 中野晴久, 1995. 常滑・渥美. 中世土器研究会(編), 概説 中世の土器・陶磁器. 真陽社, 京都, pp.383-400.
- 中村豊, 1998. 稲作のはじまり: 吉野川下流域を中心に. 東潮(編), 川と人間: 吉野川流域史. 溪水社, 広島, pp.79-100.
- 中村豊, 2000. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年. 田崎博之(編), 突帯文と遠賀川. 土器持奇会論文集刊行会, 松山, pp.471-498.
- 中村豊, 2002. 縄文から弥生へ: 眉山北麓遺跡群の分析から. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.245-258.
- 中村豊, 2003. 徳島における弥生時代終末期の鉄器生産. 青藍 1, 25-36.
- 中村豊, 2009a. 医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 1, 1-10.
- 中村豊, 2009b. 西病棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 1, 11-28.
- 中村豊, 2010a. 庄・蔵本遺跡・医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修その他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2, 1-9.
- 中村豊, 2010b. 庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2, 11-21.
- 中村豊, 2010c. 概要. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2, 33-42.
- 中村豊, 2016. 徳島市三谷遺跡の研究 1: 徳大 1・2 次発掘調査成果から. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 2, 1-10.
- 中村豊, 2017. 徳島市三谷遺跡の研究 2: 徳大 3・4 次発掘調査成果から. 中村豊(編), 縄文/弥生移行期における農耕の実態解明に関する研究. 徳島大学大学院総合科学研究部, 徳島, pp.23-43.

- 中村豊編, 2008. 庄(庄・蔵本)遺跡:徳島大学蔵本団地動物実験施設建設に伴う発掘調査報告書. 徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 中村豊編, 2010. 庄(庄・蔵本)遺跡:徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書, 体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺. 徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 中村豊編, 2011. 庄(庄・蔵本)遺跡:徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査報告書, 弓道場建設に伴う立会調査報告書. 徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 端野晋平編, 2018. 庄・蔵本遺跡 3:ポイラータンク地点 (1998 年度立会)・第 22・30 次調査地点. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治, 2015. 庄・蔵本遺跡第 27 次調査(立体駐車場地点)の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1, 43-97.
- 橋本達也, 2001. 弥生時代前期朝鮮系無文土器の展開と徳島. 青山考古 18, 167-176.
- 早淵隆人, 1994. 黒谷川宮ノ前遺跡における古代の土器様相について. 財団法人徳島県埋蔵文化財センター(編), 黒谷川宮ノ前遺跡, 徳島県教育委員会, 徳島, pp.369-376.
- 早淵隆人, 1999. 徳島県内における古代土器様相:川端遺跡出土土器の位置づけ. 財団法人徳島県埋蔵文化財センター(編), 金泉寺遺跡・川端遺跡, 徳島県教育委員会, 徳島, pp.122-129.
- 早淵隆人, 2002. 古代阿波における官衙と祭祀. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.629-648
- 坂東義明, 1992. 医学部の草創期(戦後医専の巻). 徳島大学生協同組合教職員委員会(編), 草創期の徳島大学. 徳島大学生協同組合, 徳島, pp.36-39.
- 平井松午, 1998. 吉野川の河川環境と流域史. 東潮(編), 川と人間:吉野川流域史. 溪水社, 広島, pp.3-25.
- 福家清司, 2002. 中世. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.135-162.
- 藤川智之, 2002. 古代. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.115-134.
- 藤川智之, 2015. 徳島県における律令期腰帯具と出土遺跡, 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 11, 71-84.
- 藤川智之編, 2002. 観音寺遺跡 I(観音寺遺跡木簡編):一般国道 192 号徳島南環状道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書. 財団法人徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- ふるさと徳島編集委員会編, 1991. ふるさと徳島. ふるさと徳島編集委員会, 徳島.
- 古田昇, 1996. 徳島県吉野川・鮎喰川下流域平野の沖積層の形成過程. 立命館地理学 8, 61-72.
- 古田昇, 2005. 多様性をもつ中央構造線沿いの徳島平野. 平野の環境歴史学. 古今書院, 東京, pp.209-246.
- 北條芳隆編, 1998. 庄・蔵本遺跡 1:徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査. 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 三阪一徳, 2015. 立会調査の概要. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1, 145-154.
- 三阪一徳編, 2016. 庄・蔵本遺跡 2:藤井節郎記念医科学センター新営, 附属図書館蔵本分館増築 II 期, 大塚講堂改修, 外来診療棟新営, 学生支援センター改修. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 山川浩實, 1995. 戦争から豊かな未来へ. 徳島県立博物館, 徳島.
- 湯浅利彦, 2002. 縄文時代. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.29-61.